

異文化研究の方法と具体例

—ジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』の読解を通して アンドレ・ブルトンの『ナジャ』の運動性を分析する—

Method of the intercultural studies and its example

-Analyzing the movement in *Nadja* of André Breton by reading *On the road* of Jack Kerouac-

加藤 彰彦

Akihiko KATO

[要旨]

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』においてテキストの中で出発点、休憩地、更には目的地なるものが設定されており、またナジャとの出会いと別れに至る過程においてもパリ市内を中心として場所が明記されている。この場所を巡る形で物語が進行するわけであり、場所の移動とそれに関連付けて語りの運動性に注目し考察したのが本論考である。分析を行なうにあたって、ジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』に見られる場所の移動と語りの運動性を参照した。ここに見られる運動性とは、目的地に向かいながらもそこから逸脱する寄り道を尊重する態度であり、過程こそ大事であるとする考え方である。『ナジャ』においても目的地に向かうというよりはパリ市内の散策が中心であり、生活圏とそこから離れた場所への移動でブルトンとナジャの関係にも変化が見られることを指摘した。またこれを理論的に裏付けるために、ドゥルーズの逃走する精神という考えに注目した。この逃走する精神によって書かれたテキストとしてプルーストの『失われた時を求めて』を捉え、テキスト生成の原動力となるものが一つの例としてマドレーヌ菓子によってもたらされた幸福感であることを明らかにした。『ナジャ』においてこれに該当するものがブルトンの言う恩寵であり、ここにおいて神の介入を考えるとともに、自分の中に判断基準が前提としてあることを指摘した。これこそが、目的地に直線的に向かうのではなく、精神を自由に遊ばせることを可能にするものであると結論付けた。

キーワード：アンドレ・ブルトンの『ナジャ』、ジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』、ドゥルーズの逃走する精神、『失われた時を求めて』における幸福感、『ナジャ』における恩寵

序章

1928年に初版が刊行され34年後の1962年に改訂したアンドレ・ブルトンの『ナジャ』は、パリ市内で偶然に出会ったナジャにシュルレアリスム精神の具現化を見、また自身も自己同一性の問題に関心を寄せるなど、極めて内面的な心の動きを綴った作品であるが、一方で具体的な地名に言及しながら、その場所を作品成立にあたっての重要な視点とするというように、場所の移動に重きを置いている。具体的に見ていくなら、ナジャの物語を展開する前段階において

ブルトンは次のように書いているのだ。「私は出発点として、私が1918年頃住んでいた、パンテオン広場の、偉人ホテルを、そして休憩地として私が1927年の秋全く変わりにくいる、ヴァランジュヴィル-シュルメールのアンゴの館を選択しよう（中略）（私は『ナジャ』を書きたいと思っていたのであるから、他のやり方があったというのは可能だったか。）」(PI p.653)¹⁾

つまり物語成立の前提として場所の指定があるわけだ。更にブルトンはナジャの物語について考察を加えるにあたって、場所の見直しをするのだ。これはナジャの物語が終わり、作品それ自体に対する扱いに苦慮している段階で試みられたことなのである。つまり「私はこの物語が連れて行くことに成功している場所のいくつかを再び訪れることから始めた。」(PI p.746)

このことは何を意味するのか。自己同一性などの極めて内面的な問題を扱っているにも拘らず、ブルトンはテキストを成立させるにあたって場所を設定しかつその見直しを最初にするのである。この場所の設定、更にはテキストに沿って場所の移動が行なわれることの意味について考察するために、我々はジャック・ケルアックによって書かれ、1957年にアメリカで刊行された『オン・ザ・ロード』を取り上げた。この作品がアンドレ・ブルトンやシュルレアリスムと何らかの接点があるということはないし、そのような指摘がされているわけでもない。ただ作者であるケルアックは1922年アメリカの東部で生まれているが、両親はフランス系カナダ人で、家ではフランス語を話していたとのことである。つまりケルアックにとって英語とは外国語であったという事情がある。この『オン・ザ・ロード』については1950年代から60年代にかけてのヒッピー文化や「ビート・ジェネレーション」の聖典としての扱いを受けている。ボブ・ディランには自らの人生を変えた本と言わしめていて、様々な影響を与えた伝説の書となっている。もちろん我々はこちらにおいて当時の文化や後の世代に与えた影響について言及する意図はない。この作品に見られるここではないどこかへ行きたいという思い、移動や旅に対する憧れをまず前提として捉え、その運動性がテキストにどのように作用しているかという点に注目するのである。そして更にこの場所の移動によるテキストの成立という観点を補強するために、バルナール・オリヴィエによって書かれた『ロング・マルシュ』を参照することとした。これは作者が1999年から2002年まで4年間でトルコのイスタンブールから中国の西安までの一万二千キロのシルクロードを一人で歩いたという記録である。ただこの全ての行程を一度に踏破したというわけではなく、四つの行程に分けていて、『ロング・マルシュ』というのはその最初にあたるものである。このテキストを参照することによって、『オン・ザ・ロード』の相対化、脱構築が図られることになるだろう。その上で『ナジャ』における場所の移動に注目するわけである。しかし問題はここで終わるのではない。そもそもこの場所の移動は、何のためにあるいは何の結果として出てきたのか。ここにおいて我々が留意したのは、現実の場所の移動と併行して行なわれている語りの運動性なるものに注目することなのである。つまりテキスト成立のための前提として現実における場所の移動があり、それに伴って語りの運動性が成立していく、あるいはそれに転化していくという構図である。このことを理解するために、我々はマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の第七篇である『見出された時』を参照した。このテキストの中には場所の移動を主題として取り上げることはないのだが、ここにあるのは幸福感の追究であって、これはブルトンが『ナジャ』において問題にしている恩寵と密接

に繋がっていることが理解される。つまりここにおいてブルトンが『ナジャ』において言及している「追求」(PI p.714)が、場所の移動から転化して極めて内面的なものになっていることが明らかとなるだろう。そしてこの辺りの理解を補強するために、プルーストの『失われた時を求めて』のテキスト分析であるジル・ドゥルーズの『プルーストとシーニュ』に注目することになり、更にはドゥルーズの他の著作にも言及していくこととなる。ドゥルーズはフェリックス・ガタリとの共著となる『アンチ・オイディプス ―資本主義と分裂症』において、更には『ミル・プラトー ―資本主義と分裂症』において、先へ先へと進むことを余儀なくされている資本主義に対して別のあり方を示唆しているが、この運動性こそ『ナジャ』に見られるブルトンの語りの運動性として指摘できるのではないかという点を我々は明らかにしたいと思っている。もっともこのような運動性は全体を体系的に捉えるものではなく、その意味で自由なのであるが、『ナジャ』が1928年に刊行された初版に対して、1962年に改訂版として出されていて、つまりブルトンは34年経った時点でこのテキストを見直しているわけであり、かつ読み易くするために様々に手を加えたということではありながら、基本的な部分は初版と変わらないという点に注目するならば、大きく変わっているのは34年経ったということで時を隔てたブルトンの視点であり、これについてもドゥルーズは何かの示唆を与えてくれるであろう。またその対象となっているナジャについても、自己同一性という観点から見れば他者たり得ないということでの失敗例として処理されてしまうのであるが、34年後においても依然として有効であるとするならば、シュルレアリスム精神の具現化、ドゥルーズの言うところの融合という観点から説明することができるのではないかと思う。そして体系的ではないながらも様々な事象が存在し、それに意味を与えることができるという観点に立つ時、我々は神の視点を持ち出してくることが可能になり、「恩寵」(PI p.653)という概念に到達するのであるが、ここにおいてドゥルーズは何らかの答えを提示するはずである。最後に『ナジャ』において言うならば、ブルトンがナジャを問題にするしないという時点において、既に判断が行なわれているということであり、自分の基準が存在するということなのである。つまり恩寵を問題にする前段階において既に「自分の」基準があるということであり、ここにおいて我々は本論考においては取り立てて問題にすることのなかった自己同一性の問題についても答えることができるのではないかと考えるわけである。以上のような論理展開に従って、第一部においてはテキストに見られる現実の場所の移動に着目して分析を行なった。この中で第二部に繋がっていく視点として、ブルトンは実際に起こったことをできるだけ客観的に記録していくという立場を取っていると「序言」において表明しながらも、別に虚偽の記載があるというのでは決してないが、恣意的とまでは言わないまでも適当なところもあり、もちろんそのこと自体ナジャの物語の前段階において明言していることであって、何ら矛盾はないのであるが、語りの運動性について言及できるものがあり、それを指摘することになるだろう。そして第二部においてその語りの運動性に視点を移して論理展開を行なうのであるが、既に指摘したようにその過程においてブルトンが『ナジャ』のテキストにおいて問題にしている様々な事柄が自ずから明らかになるのであり、語りの運動性とは言いながらも、ただ単に語りの構造だけではなく大きな問題を孕んでいることを指摘しておかなければならない。

第一部 『ナジャ』と『オン・ザ・ロード』に見られる場所の移動

第一章 『オン・ザ・ロード』の行程

ジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』のテキストは第一部から第五部までであり、それぞれが出発点から到達点までの一つの旅として成立している。ここにあるのはアメリカ東部のニューヨークから西部に向かっての旅であり、何か具体的な目的用件があるというわけではない。前提として何となく西部に向かって行くことの憧れのようなものがあり、当初は実行に移されることはなかった。「その前から私は国土を見るために西部に行くことをしばしば夢見ていたが、いつも漠然と計画を立てているだけで決して出かけることはなかった。」(OR p.1)

ところが旅に同行する仲間の出現で、それが具体化されることになる。「それから旅行するのに素晴らしい時である、春がやって来た、そしてばらばらになっていた仲間みんなが次々に旅行に行く準備をしていた。(中略)私はまさに初めて西部に旅する準備をした。」(OR p.6)

このように仲間との旅が始まるのであるが、これがテキストとして成立するのは、彼自身小説家であったということもあるだろうが、「そして私の全車道体験が始まったのは実際こんな風だったし、起こることになっていた事柄は素晴らしすぎて言わないなんてできない。」(OR p.7)

確かに「私は若手の作家だったし出かけたかったのだ。」(OR p.8) と言うように、作家として書くべきものを求めていたとは言えるし、作家という立場を離れても求めるべきものがあつたのだ。「進路に沿ってどこかで女の子たち、夢のように美しい景色、何でもあつたろうと私は知っていた。進路に沿ってどこかで貴重なものが私に手渡されるだろう。」(OR p.8)

ここにおいて明らかになってくるのは、ニューヨークを出発してサンフランシスコに向かうという目的地が決まっているにも拘らず、むしろ求めるべきものは途中の過程にあるようだという事である。そしてテキストが進むことでわかってくることは、確かに様々な女性と知り合いつきあうことにもなるわけであるし、様々な体験もすることになるのだが、旅の成果として示されるものは全く別のものであるということだ。つまり何らかの成果を獲物を狙って手に入れたかのように我々に示されることはないのだ。例えば第一部のそれも旅が終わったわけでもない段階で、主人公＝語り手は次のように言うのだ。「あの究極のものは君が手に入れることのできないものだ、カーロ。誰もあの究極のものに辿り着くなんてできない。我々は一度だけそれを掴むという希望で生き続けているのだ。」(OR p.48)

何とも達観した考えであるが、それにも拘らずあるいはそれだからこそ、旅に出る時や目的地に向かう時の高揚感が対比的に示されることになるのである。ニューヨークからサンフランシスコに向かう途中のデンヴァー辺りの心境は次のようなものである。「突然私たちは山から降りてきてデンヴァーの偉大なる海蝕平坦地を見渡した。熱がオープンからのように高まった。私たちは歌を歌い始めた。私はサンフランシスコ行きのバスに乗りたくてむずむずしていた。」(OR p.56) あるいはデンヴァーにいる時心は高揚していなかったのだが、そこから脱する必要を感じるのだ。つまり「私はカーティス・ストリートの物寂しい安っぽい歓楽街を歩き回った。

ジーンズをはき赤いシャツを着た若者たち。ピーナツの殻、映画館の入り口のひさし、射撃の店。きらきら輝く通りの向こうには暗闇があったし、暗闇の向こうには西部があったのだ。私は行かなければならなかった。」(OR p.58)

この後デンヴァーを去って更にサンフランシスコへの途中にあるフリスコに向かうのであるが、この辺りでは次のような心境が語られる。「デンヴァーからフリスコへのバスの旅は我々がフリスコに近付けば近付く程私の全ての魂が踊ったことを除いて平穩無事だった。」(OR p.60)

ところがそのフリスコ辺りまで来ると、心境に変化が現われてくる。つまり単なる憧れや高揚感のみで語ることはできなくなってくるのである。具体的にテキストを見てみよう。「私はめまいがするまでぐるっと回った。私は夢の中にいるように倒れて、危機を脱するだろうと思った。ああ私の愛する女の子はどこだ。私は考えた、そして下の小さな世界のあらゆる所を見ていたように、あらゆる所を見た。そして私の前には私のアメリカ大陸の大いなるむき出しの隆起と巨大なものがあつた。ずっと向こうのどこかでは、陰気で、無茶苦茶なニューヨークがほこりと茶色の蒸気の雲を吐き出していた。東部には茶色くて神聖な何かがあるのだ。そしてカリフォルニアは洗濯物の並びのように白く無知で愚かである——少なくともそれが私がその時考えていたことである。」(OR p.78-79)

そして更に目的地に近付くと、心境は一変するのだ。バスに乗って移動していたのであるが、ハリウッドに入った時のことである。「私は窓から外を貪欲に眺めた。化粧漆喰の家と椰子とドライブ・イン、全ての馬鹿げたもの、草ぼうぼうの約束の地、アメリカの想像上の果て。我々はメイン・ストリートでバスから降りた、そこはカンザス・シティやシカゴやボストンでバスを降りる所と全く変わらなかった——赤レンガ、汚く、そこいらをうろついている変わり者、希望のない夜明けにきしむ音をさせているトロリー、大都市の墮落した臭い。」(OR p.83)

このような現実を見せられて賞賛することはできないだろう。というわけで所持金も少ないことから、ヒッチハイクでニューヨークに戻ることに決めるのである。このニューヨークまでの行程の中で的心境はまさに「私は家に帰りたかった。」(OR p.104)

そして実際に家に戻ってきた時、「十月だった、自宅、そして再び仕事。」(OR p.107)

これが第一部の終わりであって、帰るべき所があつての旅という印象を受ける。別に苦々しい思いをしたというわけでもないのだが、明らかに失望が残ったはずである。このような旅を経験すれば、二度と行きたくないということであっても不思議はないのであるが、第二部において旅は再開されるのである。もっとも今回は短時間のものを計画していて、テキストによると「三十時間で家に戻ってくると約束して」(OR p.116)とある。ところがそれ程計画的ではない部分もあって、「私はこの全てがどこに通じているのか知らなかった。私はどうでもよかった。」(OR p.124)とも書かれている。この旅において目的地は現実に存在するのであるが、意識の中では現実には存在しない理想の街が存在するようになっているのだ。テキストにおいては次のように書かれている。「まさにその時くらいだが奇妙なことが私を悩まし始めた。(中略)カーロ・マルクスと私は一度、膝と膝を突き合わせ、二つの椅子に、向かい合つて、一緒に座つた、そして私は彼に砂漠を横切つて私を追いかけてくる見知らぬアラビア人の姿について私が見た

夢を話した。私は追い払おうと努力するのだ。結局は私が〈保護都市〉に着く直前に私に追いついてしまった。〈これは誰だ〉とカーロが言った。我々はそれをじっくり考えた。私はそれは、屍衣を身につけた私自身だという考えを出した。それはそうじゃない。何か、誰か、ある亡霊が人生という砂漠を横切って我々全員を追いかけていたが我々が天国に到着する前に我々を捕まえるはずだったのだ。当然のことながら、私がそれを振り返って見る以上、これは単に死だ。死は天国の前に我々に突然降りかかってくる。生きている間に我々が憧れ、我々が吐息をつき苦悶しあらゆる種類の甘い吐き気をもよおさせる一つのことは、恐らく子宮の中で体験され死の中で（我々はそれを認めることをひどく嫌うけれども）再生されることしかできないある失われた至福の記憶なのだ。」（OR p.124）

もっともこのような議論は同行の仲間から否定され、これ以上深入りしないことになる。ここにおいて旅の様相は二局面に分かれると考えることができるだろう。つまり「私がしたかったことはもう一度西海岸までの素晴らしい旅をして春学期に間に合うよう学校に戻ってくることだった。」（OR p.129）というように、いかにも学生らしい明るさと気楽さでもって行なわれる旅であり、旅を人生にたとえるような深刻さはないと捉える見方と、「ニューヨークやニューオーリンズにいるまさに他の奴らのように、彼らは巨大な空の下で当てもなく立ち止まっていて、彼らについて何もかもがかき消されている。どこへ行く。何をやる。何のために——眠ることだ。しかしこの愚かな連中は前を見ていたのだ。」（OR p.166）と書くように、深刻さを伴った見方である。もっともその深刻さに目をつむる形で折り合いをつけることになるのだ。この旅も結局のところニューヨーク行きのバスに乗るところで終わりを迎えるのであり、同行していた仲間とも別れ、「我々はみんなお互いに二度と会うことはないだろうと考えていた我々はそんなことどうでもよかったのだ。」（OR p.178）という具合である。仲間との友情も成立しないとすると、何のために旅を続けるのかと思われるが、第三部において旅の本質が明らかになる。テキストには次のように書かれている。「我々は行くべき更に長い道があった。しかしそれは何でもない、道は人生なのだ。」（OR p.212）

つまり目的地がどこであれ、そこに向かって進んでいるということ自体に意味があるのだ。従って目的地とはとりあえず設定されたものであって、そこでなければならぬというわけでもないのだ。第四部になると、この状況に自覚的であって、始まりには次のように書かれている。「ニューヨークに春が来るといつも私はニュージャージーから川を渡って吹いてくる陸地の誘惑に耐えられなくなり私は行かなければならないと思う。そこで私は出かけた。」（OR p.249）

このようにいわば衝動的にという面もあるのだが、同時に自省的でもあるのだ。これは主人公＝語り手の台詞ではないのだが、旅に同行しているディーンの発言に次のようなものがあり、それに対して頷くのだ。「君の道は何か、おい。——信心深い少年の道か、血迷った男の道か、虹色の道か、水面下の道か、どんな道でも。とにかく誰にとってもどこかに道はあるというものだ。実際どこでどうするんだ。」（OR p.251）

このような問いかけが成り立つことを認めながらも、それに対して深く入り込んでいくということはないのだ。つまり考えずにただ突き進むということが行なわれるのだ。「我々の実際の生活、あるいは実際の夜、その地獄、無意味な悪夢の道について耳障りな狂気と混乱を夢想

することなど決してなかった。その内側の全ては終わりもなく始まりもない空虚だ。無知の憐れむべき形。(中略) 私は私自身の日々の荒涼たる様をぼかんと口を開けて見入った。私にはまた行かなければならないひどく長い道があったのだ。」(OR p.254)

このようにして第四部も終わることになる。そして第五部では、メキシコシティからニューヨークへと戻ってくることになるのであるが、その第五部の終わりは旅の総括というか、旅に対する考えというものが示されることになる。「だからアメリカで陽が沈む時私はニュージャージーの長い、長い空を見つめながら古い壊れた川の防波堤に座って西海岸までの信じられないくらい巨大な一つの隆起の中で広がっているあの全ての未開の陸地、そしてあの全ての伸びている道、その巨大さの中で夢見ている全ての人を感じ取っている」(OR p.307)。

既に明らかになっているように、旅の目的は目的地にあるわけでもなく、またそこでの何か求めるべきものがあるというわけでもなく、途中の段階にある道にあるのだ。このように考えるならば、学生であることもあって学校が始まるまでという期限付きの旅であることから、いつまでも旅を続けることはできないのであるが、ただ単に目的地を目指すということだけではなく、つまり直線的に目的地を目指すのではなく、別の道を行くということも考えられるようになる。第一部でヒッチハイクでロサンゼルスを目指そうとしていた時、まさに御詠え向きの車に遭遇することになる。それはまっすぐロサンゼルスを目指すもので、その車の持ち主曰く、「〈一直線に?〉 / 〈ずっとだ——もし君がLAに行きたいと言うのならさあ乗った。〉」(OR p.24)

これに対して、「私はこれについてじっくり考えた。一晩中ネブラスカ、ワイオミングを突っ走って、そして朝にはユタ砂漠、そしてそれから午後にはほとんど恐らくはネヴァダ砂漠、そして実際のところ予測できる時間の範囲内でロサンゼルスに到着するという考えはほとんど私に私の計画を変更させた。」(OR p.24)

つまり目的地はありながらも、そこへの到達は同時に出来るだけ先延ばしにしなければならないのである。実際デンヴァーでは「それからみんなは山への素晴らしい旅を計画し始めた。」(OR p.46) し、一刻でも早く目的地に向かうわけではないのだ。またニューヨークに戻る段階になっても、ただ単に戻るというわけでもなく、別のこともしてみようということになる。例えば次のようなことだ。「午前中我々は大膽にも我々の新しい計画を案出した。我々はベイカーズフィールドまでバスに乗って行って葡萄摘みの仕事をしようということだった。それを二三週間した後我々は適当な方法、バスでニューヨークに向かって進むということだった。」(OR p.90)

このニューヨーク行きも一気にというわけではなく、これは専ら金銭的な面での理由だが「私はピッツバーグに着いた時それについて心配しようと考えた。」(OR p.102) という具合である。旅に対する考えや、そこから何を得心かという内面的なこととは別に、実際の面から見ると、出発点から目的地まで一直線というわけではなく、様々な紆余曲折があるということである。

第二章 『ロング・マルシュ』の行程

本論考においてはジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』の読解を通して『ナジャ』

の運動性を探るということであるので、第一章においてその概観を提示したわけであるが、その特異性を認識するとともに、この種の旅行記として相対化するために、バルナール・オリヴィエの『ロング・マルシュ』を見ておきたい。作者は退職を目の前にして生きる意欲を失い、これからどうやって生きていけばいいのかという思いに駆られるのであるが、この時トルコのイスタンブールから中国の西安までのシルクロードを歩いて行こうとしたのであり、その成果がこの本として結実したということである。ここにおいて語られているのは、ただひたすら歩くことによって目的地に達しようという意志である。旅の途中、車に乗せて行ってやろうと申し出る地元の人たちの厚意を断わり、脚の痛みや腹痛などにも悩まされながら、ただひたすら先を目指すということになるのだ。この中で語られているのは、紀行文としてよくあるように出会った人たちの親切とか地元で食べることになった料理についての感想であり、また政情不安な場所ということもあり、いかに危険な目に遭ったかということも同時に語られることになる。このことは更に政治やそれをもたらした歴史についても言及することとなる。作者の意図としては、この旅は直線的であるべきで、というのも全て歩き切ることから時間や疲れとの戦いということもあり、のんびりしていられないということがある。また既に指摘したように、政情不安な所をそれを承知で歩いて行くということもあり、歩く必要はあるが出来るだけ早く立ち去りたいということもあるのだ。ところが逆の現象も起きてくる。これは作者本人が意図したことではないのだが、まさに命綱とも言うべき地図が正確ではなく、途中にある目的地、つまりそこはその日の宿泊地となるべき所で、立派な一流のホテルというのではないにしても、安全に泊まることのできる設備を提供してくれる所であるかどうかが重要であり、またそのような宿泊施設がない場合は、地元の人の家に泊めてもらわなければならないのだが、そのような民宿を提供できる場所かどうか判断材料となるわけで、それを記した地図というのは必要欠くべからざるものなのであるが、その地図に示されている所に行ってみると、その街や村が存在しないということにもなっていたのである。地元の人に道を尋ねて進路変更ということになるのであるが、言葉の問題もありそれが正しいとも限らないのである。このような事情からそれぞれの目的地に向かって一直線というわけではないのだが、それは作者本人が意図したことではないのである。可能であるならば一直線に行きたいというわけだ。つまり目的地に一直線に向かう道以外は、敢えて言うならば余計なもの、無駄ということになるだろう。歩いて長い行程を踏破するのであるから、回り道をしている余裕はないということである。また歩くことにこだわるのは、歩くことによって自分自身を見つめることができ、また自分にも出来ることがあるのだと再認識出来る喜びのためということでもある。作者自身記していることだが、歩くことによっていわゆるランナーズハイにも似たような状態になるということである。従って目的地に到達したいというのが第一の目的であるとは言いながらも、その途中の段階において得られる精神的豊かさといったものも重要である。ここにおいて『オン・ザ・ロード』とともに目的地だけではなく途中の過程が重要であるという視点は、共通したものであると理解することができるだろう。ただ一方は車での移動が主であり、もう一方はただひたすら歩く、具体的には一日三十キロ、四十キロというのが日課のように自らに義務として課しているのであるから、行動範囲やその自由というものはあまり比較にならないだろう。このことから『ロン

グ・マルシュ』の運動性として、直線的であることが見て取れるのである。

第三章 『ナジャ』における場所の移動

序章において記したように、ブルトンは『ナジャ』のテキストにおいて出発点と休憩地を設定している。出発点は「私が1918年頃住んでいた、パンテオン広場の、偉人ホテル」(PI p.653)であり、休憩地としては『ナジャ』執筆のために「私が1927年の秋全く変わりなくいる、ヴァランジュヴィル-シュル-メールのアンゴの館」(PI p.653)ということである。今休憩地として記したのであるが、原文では*étape*であり、意味としては「宿泊地、休憩地」ということであるから、最終的な目的地というわけではないのである。それでは目的地とは一体どこになるのかということであるが、テキストにおいてはナジャの物語が終わった第三部において「アヴィニオン(中略)そこでは素晴らしくかつ隠しておくことの出来ない一つの手がまだそんなに前ではない頃に私に〈オーブ県〉(夜明けという意味)というこれらの言葉を表わしている空色の巨大な標識板を指し示したのだ。」(PI p.749)とあるように、アヴィニオンもしくはその標識板が指し示す所として理解することができるだろう。従ってテキストによれば、パンテオン広場にある偉人ホテルを出発点として、アンゴの館を経て、最終的には「〈オーブ県=夜明け〉というこれらの言葉を表わしている空色の巨大な標識板」(PI p.749)が指し示す所に向かうという構図が出来上がるだろう。ところがここにおいてすぐさま指摘できるのは、この経路が直線的ではない、あるはずがないということである。そもそもパンテオン広場にある偉人ホテルが何故出発点なのか。1918年の9月20日以降医学生であったブルトンはパンテオン広場9番地の偉人ホテルに寄宿していた。偉人ホテルと言うと何やら立派なホテルのように思われるが、貧乏な学生のためのホテルであったのだ。この時期はちょうど自動記述を試みていて、また『シュルレアリスム宣言』の中で二つのかけ離れたイメージが融合することによって新たなイメージが出現するというピエール・ルヴェルディの考えが紹介されているが、これが載ったのが1918年3月発行の『ノール・シュド』誌であり、まさにシュルレアリスムの始まりと考えることができるだろう。しかしこの時から1926年のナジャとの出会いへと一直線に繋がっていくわけではない。少なくとも『ナジャ』のテキストにおいては、ナジャの物語が始まる前段階でブルトン自身のシュルレアリスム的とも言うべき体験が挿話の形で語られているのであるが、それは場所とともに語られるのである。ただそれはどこかの場所を目的として指向しているように読み取れることはない。この中でブルトンの生まれ故郷であるナントが出て来るのであるが、最初に示されるといってもなく、ただ単に思い付いたので書き入れたという趣きである。それ以外はパリでの体験として括ることのできるものである。そしてナジャの物語が始まる直前、つまり第一部の最後は次のように書かれている。「ついにアンゴの館の塔は爆発し、鳩から落ちる、羽ペンの雪全ては、少し前は瓦の破片で敷かれていたが今では本当の血で覆われている大きな中庭の土に触れて溶けるといことになるのだ！」(PI p.682)

ここでアンゴの館に到達したとするなら、それまでの挿話が全てということになるのだろうか。そうではあるまい。ナジャの物語はそれまで様々な挿話として書かれてきたもの以上であり、特別に書き記される必要があるために後置されることになったが、本来なら挿話の中

に入るべきものなのである。従って我々はナジャの物語の中で示されている場所の移動に注目していくことにしよう。1926年の10月4日のことだが、ブルトン自身は何の目的もなく、そのため「私はそういう時を過ごす秘訣を持っている」(PI p.683)ということから、ラファイエット通りにやって来ていた。ラファイエット通りと言っても長い通りであるわけだが、ブルトンはトロツキーの新刊書を買って求めるということで、「ユマニテ」という書店に立ち寄っている。マルグリット・ボネの研究によると、この書店はラファイエット通りの120番地にあったということである(PI p.1542)。その後ナジャと出会うことになるのだが、テキスト上においては「そこ、ある教会の前の、私が名前を忘れていながらもと知らないかどちらかのこの十字路」(PI p.683)とだけ記されているが、これもマルグリット・ボネの研究によると、当時はラファイエット広場と呼ばれていた現在ではフランツ・リスト広場の十字路であり、教会はサン・ヴァンサン・ド・ポール教会である(PI p.1542)。つまりブルトンは、本を買って求めてからそれ程時間を経過せずにナジャと出会っていることになる。ちなみにナジャがリールからパリにやって来て泊まっていたホテルは、マジヤンタ通りの106番地にあったスフィンクス・ホテルで、現在でも名前をスウェーデン・ホテルと変えて存在している(PI p.1550)。このマジヤンタ通りはブルトンとナジャが出会った十字路の近くにあり、いわば生活圏内で出会ったということになる。ナジャはその時マジヤンタ通りの美容院に行くところだったと言っている。ブルトンとナジャはこの後北駅に近いカフェのテラスに座って話し始めるのであるが、この北駅もすぐ近くにある。この後二人はポワソニエール通りまで話しながら歩いて来るのだが、この通りも近くにある。この10月4日の最後は意気投合してまた会うということで、「私たちはラファイエット通りとポワソニエール通りの角にある酒場で翌日再会することに取り決める。」(PI pp.688-689)

この場所もほとんど変わらない。つまりこの日の出来事はナジャにとっては、生活圏内である北駅のすぐ近くで起こったと捉えることができるのである。10月5日は前日に約束したラファイエット通りとポワソニエール通りの交わる角の酒場で会うのだが、この後ブルトンはタクシーで家に帰ることになるのだ。ナジャも同乗することになり、家の前で別れる。この時のナジャの発言は次のようなものである。「そして私、これからはどうしよう。どこへ行くのか。でもラファイエット通り、ポワソニエール通りの方にゆっくりと降りて行くのが、私たちがいたまさにその場所に戻ることから始めるのがとても簡単だわ。」(PI p.690)

ブルトンの住居はフォンテーヌ通りの42番地で、サクレ・クール寺院のあるモンマルトルの坂にある(PI p.XLIV)。サクレ・クール寺院から若干離れていて、北駅はそれよりも更に若干離れたところにある。ブルトンはタクシーで帰宅しているわけだが、距離的に歩けないという程でもない。ナジャにしてみれば、再び生活圏内に戻ることを意味している。10月6日は、ブルトンはナジャとラ・ヌヴェル・フランスで落ち合うことになっているのだが、この店は既にブルトンとナジャが会っていたラファイエット通りとポワソニエール通りの交わる角の酒場のことなのだ。ブルトンは5日はタクシーでこの店から自宅に戻っているが、この日は歩くことになっている。テキストでは次のようになっている。「ぶらぶら歩きをそうしなくても済むように (下線原文) 私は五時半にナジャに落ち合うことになっている〈ラ・ヌヴェル・フランス〉

に徒歩で向かうつもりで四時頃出かける。ちょっとした買い物をしなければいけない、オペラ座までいくつかの通りを迂回する時間というわけだ。いつもとは逆に、ショセーダントン通りの右側の歩道に沿って行くことに決める。私がまさにすれ違おうとしている最初の通行人たちの一人が、最初の日の様子をしたナジャなのだ。」(PI pp.690-691)

ブルトンの自宅からオペラ座までは南の方に行けばよく、歩けない距離ではもちろんないし、ショセーダントン通りはオペラ座の東側にある。ナジャと会う店は自宅からすれば東南東の方向にあるから、確かに遠回りではあるが大した距離でもない。むしろナジャにしてみれば、明らかに生活圏内からは遠くにあると言えるだろう。ナジャの理由はボンボンを探しに来たとあるが、定かではない。この後ブルトンとナジャは近くのカフェに入るのだが、所在は明確ではない。この後ナジャが家に帰ると言うので、ブルトンはタクシーで送って行こうとするのだが、ナジャの自宅は芸術劇場のすぐ近くだというのである。この芸術劇場は現在ではエベルト劇場という名前になっているが、所在地はシェロワ通り2番地の2である(PI p.1544)。これまでナジャの生活圏はマジヤンタ通り、北駅の近くという風に考えていたが、少し遠い。ここにおいてナジャが何故自宅近くではない北駅近くをあたかも生活圏であるかの如く動き回っていたのかという疑問が出てくるのだが、今はこの問題をこれ以上追求することなく場所の移動について見ていこう。ブルトンがナジャをタクシーで送って行くのだが、その途中話の流れで夕食を共にしようということになる。どこに行くかを決めたのはナジャのようであるが、ナジャは自分がそう思っていたサンルイ島ではなく、ドフィーヌ広場にブルトンを連れて行ってしまふ。いずれにしてもこの辺りは今までの北駅近くからは遠く離れていて、場所の移動ということでは注目すべきところだろう。またブルトンは『ナジャ』を1928年に刊行する前に断片的に雑誌に公表しているのであるが、この10月6日の出来事を『シュルレアリスム革命』誌の11号に「ナジャ(断片)」として明らかにしていることから、ブルトンの思いを感じ取ることが出来る。ナジャがブルトンを連れて行ったドフィーヌ広場というのは、セーヌ川にある島であるサンルイ島の西にありそれより大きめのシテ島にある。後でも出てくることになるが、フランス革命時のパリ裁判所付属の牢獄であったコンシエルジュリの西に面している。テキストでも言及されているブルトン自身以前に住んでいたことのあるシティ・ホテルは、このドフィーヌ広場29番地にある。この後食事をし、再びコンシエルジュリ近くを歩いた後、二人はルーヴルの方に向かう。ここは橋を渡ればすぐのところにある。そして「夜中の十二時頃、私たちはここチュイルリー公園にいる」(PI p.698)。

このチュイルリー公園はルーヴルの西にあるのですぐ近くである。真夜中過ぎであるがチュイルリー公園を出た後、北に少し行ったところにあるサントノレ通りを歩き一軒の酒場に入るのだが、この酒場の名前は「オ・ドファン」であり、サントノレ通り107番地にある。この点についてナジャは次のように指摘する。「彼女は私たちがドフィーヌ広場la place Dauphineからオ・ドファンAu Dauphinにやって来たことを強調する。」(PI p.698)

そしてこの10月6日の最後は次のように書かれている。「私たちは翌々日の晩にしか〈ラ・ヌヴェル・フランス〉で再会しないことに取り決める。」(PI p.698, p.701)

つまり10月6日の出来事は、それまでの北駅近くというよりもパリ1区で起こっているの

ある。それをブルトンはまた北駅近くに戻そうとしていると言えるだろう。ところが会う約束をしたのは6日時点で明後日ということであるから8日になるのだが、ブルトンはナジャに会いたくてたまらない。そこで約束はしていないのだが、以前に行ったラ・ヌヴェル・フランスに行こうとするのだ。その後のことだ。「私は私の妻と一人の女友達と一緒に三時頃出かける。タクシーの中で私たちは昼食の間もそうしていたように、彼女について話し続ける。突然、私は通行人に何の注意も払っていないのに、何かわからないが素早い斑点が、そこ、サン・ジョルジュ通りに入るところの、左の歩道で、ほとんど機械的に私を窓ガラスに打ち付けさせる。それはあたかもナジャが通り過ぎていたところであるかのようだ。私は彼女が取り得た三方向の一つに、当てもなく走る。事実、それは彼女だ。」(PI p.701)

ブルトンは二日続けて偶然にナジャと出会ったことを強調するが、このサン・ジョルジュ通りはブルトンの自宅からすぐのところにある。10月8日ブルトンはラ・ヌヴェル・フランスに行ってナジャと会えることを期待したのだが、ナジャは現われなかった。そこでブルトンは彼女の家に向かうのであるが、既に指摘した芸術劇場の近くにある劇場ホテルである。所在地はシェロワ通り5番地にある(PI p.1548)。この時点では10月6日に1区に出かけて行ったことを除いては、ブルトンとナジャの自宅近くでの出来事として捉えることができる。10月9日、ブルトンがナジャに会いたいという旨の伝言をした後、ナジャは速達便で五時半にラ・ヌヴェル・フランスに来てくれと誘ってくるのであるが、8日に会えなかったのはブルトンの勘違いで「前日彼女がいなかったのは誤解に基づいていた。私たちは、例外的に、〈ラ・レジャンス〉で会う約束をしていてそれを忘れていたのは私なのだ。」(PI p.703)

このラ・レジャンスという店はサントノレ通り161番地にあり、ブルトンとナジャが二人で1区を夜中に歩き回ったところである(PI p.1548)。10月10日は夕食の場面から始まるのであるが、そこはマラケ河岸のレストラン・ドラボルドである。ここはマラケ河岸の23番地にあり、6日に出かけたシテ島からポン・ヌフを渡ってすぐのところにある(PI p.1549)。この食事の後フランス学士院のところまで行くのであるが、ここもすぐ近くのところにある。更に二人はセーヌ通りに進み、ドルボン書店のところまでやって来る。この書店はセーヌ通り6番地にある(PI p.1549)。10月11日ブルトンとナジャは会うのだが、どうも良好な関係とは言えないようだ。「午後無駄に長引いた会談の結果私は機嫌が悪い。その上ナジャは遅れてやって来たし私は彼女の側から何も例外的なことは期待していない。私たちは通りをあてどなく散歩するが、お互い近くにいても、しかしながら非常によそよそしいのだ。」(PI p.710)

そして二人はマジヤンタ通りのスフィンクス・ホテルの前にさしかかるのである。このホテルは既に指摘したように、ナジャがリールからパリにやって来た時に泊まっていたホテルなのである。何やら原点回帰を思わせる箇所である。そして日付の付いた記載の最終日である10月12日であるが、ブルトンはパティニョル通りのカフェにいる。ここはブルトンの自宅から近いところにある。夕食の後二人はパレロワイヤルの庭園にいるのだが、先程のカフェからは遠く離れている。ここは1区であり、6日の出来事が起こった近くと言えるだろう。この時点においてブルトンとナジャの関係は順調と言えなくなるのであるが、関係修復の意味も込めてブルトンはパリを離れることを考えるのだ。テキストでは次のようになっている。「気分転換とし

て、私は私たちがパリを離れることを提案する。サン＝ラザール駅、サン＝ジェルマンにしよう、しかし電車は私たちの目の前で出発する。(中略) ヴェズィネで降りてみませんか。彼女は森の中を少し散歩することを提案する。いいねえ。(中略) ヴェズィネでは、全ての明かりは消えていて、どのドアも開けてもらうことは不可能だ。森の中の放浪は最早あまり心を引かれない。私たちは次の電車を待つことを余儀なくされ、それは一時頃サン＝ジェルマンで私たちを降ろすことになるだろう。」(PI pp.713-714)

以上のことから明らかなように、10月4日から12日までの日記風に語られる部分において、ブルトンとナジャの出会っている場所は、北駅近くの二人の生活圏内にある場合と、1区辺りに出かけている場合に大別されるというか、それ以外には存在しないのである。そしてこのことはただ単に出会っている場所が、ある種の言い方をするなら日常的なものかよそ行きのものかに留まるものではない。これまでは場所の移動ということに重点を置いてきたので、敢えて指摘することはなかったのであるが、ナジャに注目するならよりシュルレアリスム的であるかどうか、分かりやすく言えばその奇抜さにおいてどのような現われ方をするかという面に注目せざるを得なくなるのである。例えば10月4日の出会いの最後において、ブルトンはナジャから指摘されて嬉しい特性のことを書くのだ。つまり「それは私の考え、私の言葉、私の存在の仕方全てにおいてあるように思われるし、それは生涯で最も気になっていた贅辞の一つであって、素直さ (下線原文) なのだ。」(PI p.689)

また10月5日において、ブルトンはナジャの言葉遊びを捉えて、「人はここにおいてシュルレアリスムの渴望の極限、その最強の限界理念 (下線原文) に触れるのではないか。」(PI p.690)と指摘している。ここにおいてナジャはブルトンにとってよき理解者であるとともに、ブルトンもナジャの中にシュルレアリスム精神の具現化を見るというまさに理想的な状態なのである。ところが場所が日常的空間から移るにつれて、ナジャは特異な存在と化していくことになるのだ。まず二人の関係だが、「結構かなり窮屈な思いが私たちの間を支配し続ける。」(PI p.693)

この後のナジャの異常とも思える発言は、前世について言及するなど靈感の強い女性として捉えることができるかもしれない。二人で行ったチュイルリー公園での噴水のイメージに言及するところなどシュルレアリスムのイメージであり、依然としてシュルレアリスム精神の具現化としての存在と思われる。ところが徐々にナジャの生活上の問題点が、明らかに精神的な問題でもあることが同時に指摘されるようになる。そして10月12日にパリから離れるという時点において、ナジャはブルトンの理解を越える存在となっていくのである。時間的な限定としては10月4日から12日までということになるが、場所に関して言うならパリ市内という限定がナジャを捉える際には必要になってくるだろう。厳密に言うならこの時期以降もブルトンはナジャと出会っているし、恐らくはパリ市内であるということもわかっている。ところがその際テキストにおいて場所は明記されることがないのだ。例えば10月12日以降は日記形式で語られることがなくなるのだが、10月13日の恐らくはナジャと別れる境界線上にいたと思われるのだが、この時の体験がビヤホールのツィンマーでの出来事として語られる。ブルトン自身「恐らく非常に外面的なことだが、彼女の品位は全く傷がつかずに済むことができないと私は判断していたのだ。」(PI p.718)と書く程に、ナジャを遠ざけたい気持ちにさせるものであったのだが、

このビヤホールはモンマルトル通り18番地ということで、ブルトンやナジャの生活圏内にある地域なのだ (PI p.1552)。ただこの時点で別れているわけではないのだが、別れとパリが密接に繋がっていると思われる箇所がテキストの中に存在する。このツインマーでの出来事について触れた後の箇所なのだが、テキストでは次のようになっている。「お別れだわと私に言いながら、パリで、彼女はしかしながらそれは不可能だわと非常に小さな声で付け加えずにはいらなかったのだが、彼女はそれを更に不可能にするためにその時何もしなかったのだ。それが決定的に不可能になるかは、私次第だったのだ。」 (PI p.718)

もっともマルグリット・ボネはこの10月13日を二人がサン-ジェルマンまで旅行した翌日で、二人の関係の破綻を記した日と捉えている (PI p.1552)。ツインマーの出来事は10月13日の午後で、12日から13日に移る真夜中に二人はサン-ジェルマン-アン-レのプランス・ド・ガールというホテルに泊まり、午後パリに戻っているのだ。この時の状況について1928年の初版では書き記されていたのだが、1963年の改訂版では削除されている。アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグは『記憶の混乱』²⁾の中で、この削除を「実に奇妙な修正」 (PI p.1516) としているが、いずれにせよ、ブルトンがナジャを自らのよき理解者、シュルレアリスム精神の具現化された存在と見なして語る時には、明らかにパリ市内の具体的な場所、地名が併記されているということを、我々は認識しておけば充分だろう。

第四章 ヴェルサイユからパリに向かっている時の話

ブルトンはナジャの物語の後場所の見直しを試みるのであるが、この中で1928年の初版に付け加えられる形での注があり、そこでは以前は封印していた体験を記している。まずその注の冒頭は次のようなものである。「私の観点でナジャの態度の中に、多かれ少なかれ意識的な、全的な破壊の原則の適用に属する全てのことを今日まで引き出すことは私には出来ないうのだが、それについて私は例えばこの事実しか採り上げることをしないだろう。」 (PI p.748)

これはヴェルサイユからパリに戻る車の中でのブルトンとナジャの出来事なのであるが、「私がヴェルサイユからパリへの街道で自動車を運転していたある晩、ナジャが私の隣にいた女性だったのだが (中略)、自分の手を私の眼の上に置こうとし、果てしない接吻が手に入れさせる忘却の中で、私たちが恐らくは永遠に、お互いのためにしか存在しないこと、このようにして全速力で私たちが美しい木々と衝突しに行くことを望んでいたのだ。」 (PI p.748)

シュルレアリスムのイメージの融合に留まることなく、まさに現実における融合のイメージであって、当初これはブルトンとナジャの密接な関係が存在していた10月4日から12日までの間の出来事ではないかと考えた。ところがマルグリット・ボネの指摘によると、「この長い注は1928年の校正刷に付け加えられた」 (PI p.1558) と記されている。テキスト中にある「ある晩」というのも日付が明確ではない。この事実について明言することを避けていたブルトンがある種理想のあり方として明らかにする気になったのは、テキストにおいては「私はこの最後の思い出において、ほとんどその必要性を私に理解させた女性に、感謝することしかできないのだ。」 (PI p.748) と記されている。ここにおいて「女性」としたのは、原文でcelleという指示代名詞でその前にナジャの名前が出ていることから、ナジャを指すと考えるのが妥当だろうが、穿っ

た見方をするなら、敢えて指示代名詞にすることによってナジャであると明記することを避け、その女性が第三部において「君」と語りかける理想の女性としてのシュザンヌ・ミュザールを意味しているのではないかと読むことも可能なのである。少なくとも我々はそう読んでいた。もっともこの判断の適否は別にして、この出来事をナジャについて語る時に除外していいのではと考える根拠は、この出来事が起こった場所がパリ市内ではないということである。ブルトンはナジャについて書き記しておくべき出来事については、パリ市内の具体的な名前を併記しているという事実を我々は認識すべきなのである。

第二部 『ナジャ』における語りの運動性

第五章 ジル・ドゥルーズにおける寄り道の思想

ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリはその著作『アンチ・オイディプス ―資本主義と分裂症』と『ミル・プラトー ―資本主義と分裂症』において資本主義を分析しているのだが、この資本主義は貨幣を生み出す運動として捉えられる。生活に必要なものを生み出していき生活を豊かにするというだけではなく、欲望を生み出しそのことによって貨幣を生み出していくのである。従って全ては価値を生み出すかどうかという観点から判断されるのであり、常に先へ先へと進んでいかなければならない。これに対抗するには、先へと進むのではなく寄り道をする事なのだ。樹木のように一直線に伸びていくのではなく、様々なところで結び付くように根を張ることなのだ。ドゥルーズ＝ガタリは『ミル・プラトー』において、それをリゾームの生成変化として表現する。「このような系統はリゾームと名付け得るだろう。地下の茎のようなりゾームは根や小根と絶対に区別される。球根、塊茎がリゾームなのである。」(MP p.13)

また接続することによって、何か新しい意味を生み出すというのでもない。非意味的切断の原理も存在する。「非意味的切断の原理、構造を分離し、あるいはその一つを横断するあまりにも意味を持ちすぎ断絶に対して。リゾームは何らかの場所で断ち切れられ、打ち碎かれることがあるが、それらの線のどれかを辿ったり別の線を辿ることで回復するのである。」(MP p.16)

つまり一直線に進むのではなく、様々な迂余曲折を経て接続していくことが必要なのであるが、だからといって接続することによって意味を見出していくというわけでもなく、その接続を切断することも同時に認められるのである。これは資本主義的で全体化を目指す権力システムに対しては、権力を持たない者同士が横の繋がりとして接続していけば何とか対抗できるという楽観主義に対する批判でもある (OWB p.32)。極論すればそもそも繋がりなどないのではないかと考えることもできるわけであって、だからこそそこから新しい接続を試みるという考えも出てくる。ところが全体化に対抗して個々の繋がりを模索したところ、画一的な情報によって支配されるという状況も生み出されていく。だからこそ繋がること自体に意味があるというわけでもないのだ。ここから出てくるのは、繋がることでも繋がらないことでもなくて、その中間にあると考えることができるだろう。このように考えるならば、目的地に向かって一直線に進むのではなく、だからといって強制されてというわけでもなく、自然に寄り道をする事が重要になってくるのだ。その寄り道をする事によって、別の目的地を見出したかのよう

に錯覚するのではなく、気が向けばそこを立ち去ることである。そのような目的地や寄り道をした場所によって旅が一つのまとまりとして構成されるということもない。重要であるのは目的地ではなくて、そこに至る過程であり道なのである。ドゥルーズ的に言うならば、点ではなく中間が重要だということである。以上の考えから、我々は『オン・ザ・ロード』や『ナジャ』に見られる場所の移動について理解することが出来るだろう。そして次の段階として、実際の場所の移動から自由な精神を物語る語りの運動性について考察することが出来るわけである。

第六章 生成変化する逃走する精神

ドゥルーズ＝ガタリによる『アンチ・オイディプス』はフロイトによる精神分析に対する批判の書でもあって、それは精神分析がある一つの妄想から成り立っているためなのだ。それは言うまでもなくエディプス・コンプレックスであって、それに対して自覚的であることによって、そこから生じたある症状は改善されるとするのが精神分析なのである。既に触れた資本主義についても同様であるが、本論考において精神分析について批判することが目的ではない。あくまでドゥルーズ＝ガタリの考えをとりあえずは理解するということなのである。そして精神分析がある種の妄想から成立しているということからパラノイア的であるとするなら、ドゥルーズ＝ガタリの持ち出してくる対応策とはスキゾフレニア的になれということなのである。社会全体をある一つの秩序によって支配しようとする、そこにはこうでなければならないという強制が発生する。本来それが人々に浸透し効力を発揮するためには、それなりの根拠が要請されるのであるが、場合によってはその根拠すらないことがある。この意味でこの強制する思想は妄想的であるのだが、それに執着することも同様に妄想的なのである。これに対抗するために妄想を排して、スキゾフレニア的に振る舞うことが効果的であると考えなのだ。妄想に対して抵抗するために更に別の妄想を用意し、本来はこうでなければならないということも考えられるだろうが、結局は妄想的であることには変わりはないのである。このスキゾフレニア的に振る舞うというのは具体的にどういうことなのか。その一つとして、こうでなければならないという抑圧的な強制に対して、そのこうでなければならないというものを排除することなのである。このように考えるならば、ブルトンの『ナジャ』にある次のような考えも理解できるだろう。まず『ナジャ』のテキストそれ自体についてというよりも、自己同一性についての問題を提示した後の前提となる考え方は次のようなものである。「私の人生はこの種のイメージにすぎないし、私は探究していると信じていながら後戻りしていたり、かなりよく再認しなければならぬはずのものを知らうと努力していたり、忘れてしまったもののちよっとした一部を学んだり余儀なくされているということはある。私自身についてのこの見方は私自身を予め想定し、時間とともに構成するいかなる理由も持たない私の考えの完全な図を優先的次元に恣意的に位置させ、この同じ時にその精神的基盤の欠如が、私の意味するところでは、いかなる議論も受けることなどあり得ない、取り返しのつかない喪失、贖罪や失墜の観念を含む限りでしか私には誤りのように思われぬ。」(PI pp.647-648)

つまり何も前提として認めないというのではなく、議論の余地なく認めても構わないと思われるものもあるが、それを除けば前提となる思想体系は考えられないのである。もしそのよう

なもの仮にあれば、根拠のない恣意的なものに他ならないし、それに従う意思など存在しないのである。しかしだからといって、そのような思想つまり私とは何かを始めとする様々な思想の集積が必要ないというわけではなくて、むしろそれはブルトンの求めるところのものなのである。必要であるからこそ根拠なく提示されたものを、何の考えもなく受け入れるということはないのである。そしてその上でブルトンは『ナジャ』のテキストを書き始めるのであるが、それを書く上での方針も同様のものである。「この領域において私が体験する機会を与えられたことの総括的な報告を私に期待しないこと。私の側からのいかなる奔走にも応じることなく、時として私に起こったこと、嫌疑をかけ得ない方法で私に到達し、私が対象となっている個人的な寵愛と失寵の能力を私に十二分に見せることを易々と思いつくすに留めておこう。私は予め設定された順序ではなく、浮かび上がってくるものを浮かび上がるがままにさせる時の気紛れに従ってそれを語ろう。」(PI pp.652-653)

ここに認められる考え方としては、まず前提となる体系を認めないということである。もちろん支離滅裂であってはならないが、その時々気分に従うということ、根拠のない妄想の強制に対する抵抗の現われと解することができるだろう。

第七章 『失われた時を求めて』の中に見られる幸福感

確かに前提となる思想体系がなく、その時の気分に従って書くという時、逆に言うならばテキストを書かされる気分とはいかなるものであるのかという問題が生じてくる。この問題に取り組むために、我々はプルーストの『失われた時を求めて』、特にその第七篇である『見出された時』に注目した。「私」は長らくパリを不在にしていたのだが、家に戻ってきた時、ゲルマント大公邸で行なわれる午後のパーティーの招待状を見て、それに出席しようという気になる。社交生活についてはあまり乗り気ではなかったのだが、あまりそう社交生活を自らに禁じることもないのではないかと考えるとともに、むしろ積極的に出席しようという気にさせたものがあり、それはゲルマントという名前だったのである。テキストには次のように書かれている。「しかし私をそこに行かせた理由はゲルマントというこの名前であった、結構随分前から私の心から出てしまっていて、招待状にあるのを見て、その名前が私がコンブレーに見出していた魅力と意味を私のために取り戻したのである(中略)。少しの間ゲルマントの人々は再び世界の人々とは全く違い、彼ら、たとえそれが君主であっても、生きている全ての存在とは比べることの出来ないように私には思っていたのである。私の幼少時代を過ごしていたコンブレーというこの暗い街の身を切るような吹きさらしのあの空気と、小さな通りや、スタンドグラスの所に知覚していた過去との受精から出てきた存在なのである。あたかもそれが私の幼少時代と私がそれを知覚していた私の記憶の深みに私を近付かせるはずであったかのように私はゲルマントの人たちの所に行きたいと思っていたのだ。」(TR p.210)

ここにおいて「私」は『失われた時を求めて』というテキストを書き始めるまさに入口にいるのだ。ただ単に昔のことを思い出して記憶を確かにしておきたいというのではなく、ゲルマントという名前に触れたことによって「私」は何かを発見したのだ。それを明らかにしたいと思ったのだ。そして実際ゲルマントに向かうことによって、「私」は『失われた時を求め

て』を書くことの意味、その時点では書かれていなかったテキストを書く意味を見出すのである。まさにその箇所をテキストに沿って読んでいくことにしよう。「しかし我々を助けることのできる通知が届くのは時として全ては我々にとって失われたと思われる時である。人は何にも面していない全ての扉をたたいた、そしてそこから入ることができて無駄に百年間探していたら唯一の扉には、それと知らずにぶつかり、そしてそれは開くのだ。(中略)しゃきっと身を立て直し、私が前のよりは少し低い舗石に足を置いた時、私の全ての失望は私の人生のいくつかの時代においてバルベックの周囲を馬車で散歩した時に再認したと思っていた木々の眺め、マルタンヴィルの鐘楼の眺め、煎じ茶の中に浸したマドレーヌ菓子の風味、私が話しそしてヴァントゥイユの最近の作品が総合していると私には思っていた他の多くの感覚が私に与えていた同じ至上の幸福の前に消え去ったのだ。私がマドレーヌ菓子を味わっていた時のように、将来に対する全ての不安、全ての知的な疑いは消されていたのである。私の文学的才能の現実、そしてまさに文学の現実に関して先程私を悩ませていた不安や疑いは魔法によるかのように取り消されていたのだ。私はいかなる新しい推論をしたり、いかなる決定的な論拠を見出したりすることなく、先程は解決不能であった困難は、全ての重要性を失っていた。しかし、今回、私が煎じ茶に浸したマドレーヌの一部を味わっていた日に私がそうしていたように、理由を知らないまま諦めないように私はしっかりと決心していたのだ。私が体験したばかりだった至上の幸福は実際私がマドレーヌ菓子を食べながら体験していてその深い理由を探求することをその時は引き延ばしていたものとまさに同じものだったのだ。」(TR pp.222-223)

ここにおいて注目すべきは、至上の幸福という言葉である。以前ならただ単にそれを味わって満足してただけであるが、今の時点においてそれが何であるかを知りたいという欲望に駆られたのである。つまり「私」は発見すると同時に、しなければならないことに気付いたのである。そのことによって「私」が従前から自分には文学的才能がないのではないかと、失望とともに感じていた思いは消え失せてしまったということである。またこの幸福感が何であるかを明らかにすることによって、それを持続させるとか自分の思いのままに再現させることができるかもしれないという思いを抱いたとしても不思議はない。この問題を検討するために、我々はテキストにあるマドレーヌの味の場面を取り上げることにしよう。これは無意志的記憶と呼ばれる有名な場面である。この場面は『失われた時を求めて』の第一篇『スワン家の方へ』の中の第一部『コンブレー』にある。「コンブレーから、私の就寝の舞台と劇ではなかった全てのものが、最早私にとって存在しなくなったのは、既に何年も前のことだが、ある冬の日、私が家に帰った時、私の母親が、私が寒そうにしているのを見て、私の習慣に反して、少し紅茶を飲むように私に提案した。私は最初は断わったが、何故だかわからないが、私は思い直した。帆立貝の溝のついた殻の中で型をとられたように思われる〈プチット・マドレーヌ〉と呼ばれる短くて丸々と太ったこのお菓子の一つを彼女は取りに行かせたのだ。そしてすぐに、無意識に、陰鬱な日と憂鬱な翌日の見込みに打ちひしがれて、私はマドレーヌ菓子の断片を柔らかくさせていた紅茶の一さじを私の唇に持って行った。しかし菓子の破片が混ざった一口が私の口蓋に触れたまさにその瞬間、私は私の中で起こった異常なことに気付き、身震いした。気持ちのいい喜びが、その原因についての知識もなく、私を埋め尽くし、隔離していた。」(CS p.44)

この快感を再現させるなり持続させるなり、何らかの原因究明が試行錯誤とともに行なわれたとしても不思議はない。当然の如く「私」はそれを試みるのである。「この強大な喜びはどこから私のところにやって来ることができていたのか。私はそれが紅茶や菓子の味に結び付いていたが、それを無限に越えていて、同じ性質のものであるはずがないと感じていた。それはどこからやって来たのか。それは何を意味していたのか。どこでそれに気をつけるのか。私は二口目を飲むが一口目以上のものは何も見出さないし、三口目は二口目以下のものを少し私にもたらず。私はやめるべき時だし、飲み物の価値は下がっているように思われる。私が探している真実はその中にあるのではなくて、私の中にあることは明らかだ。」(CS pp.44-45)

唐突ではあるが、ここにおいて思想体系の無意味さを指摘することが出来るだろう。つまり「私」の感じた快感、幸福感といったものが現に存在することが確かであるなら、それを再現することが可能であると主張することになるだろう。確かに微妙な点があるのだから、同じ紅茶、同じ御菓子で再現できるというわけにはいかないだろう。同じ温度でなければならぬということも指摘されるだろう。更に「私」自身の体調にも関係するかもしれないということになる。そしてそれだけで留まることなく、全ての状況、それこそ周囲の状況まで同じように設定しなければならないということになる。現実的にはそのような科学的とも言える実験は不可能であるが、仮に同じ状況が設定できたとしても、快感や幸福感が確実に生まれるとは言い難い。確かに紅茶を飲み、御菓子を食べているのであり、それがきっかけになっているのであるから、身体的なものが出発点になっていることは間違いないが、これ以降は精神的なものとして扱う他はないだろう。「私」は次のように考える。「飲み物は真実を目覚めさせたが、それを認識しているわけではなく、私は解釈することはできないし少なくとも私の思いのままに、先程、決定的な説明のためにそれに再び要求し元のままで再び見出すことができたらいいと思っているこの同じ証言を、だんだんと少なくなる力とともに、無限に繰り返すことしかできないのだ。私は茶碗を置き内面に向かう。真実を見出すのは私の内面だ。しかしどのようにして。かなりの不確かさ、毎回精神はそれ自体によって理解を越えていると思わせられる。探求する精神が同時にそこにおいて探求しなければならないし全ての知識は精神にとって何でもないのである。探求する？ それだけではなく、創造するのだ。精神は未だ存在していないしそれのみが実現することができ、次いで光の中へ入らせることができる何かと向き合っているのだ。」(CS p.45)

ここにおいて考え方の大きな変化がある。当初はマドレーヌを浸した紅茶によって快感ないしは幸福感を得たのであるから、何とかそれを再現しようとする。仮にその再現がその場において駄目ではあったとしても、また次の機会に再現することのできる方法を見出せるかもしれない。つまり身体的な快感や幸福感に関心を向けていたわけである。ところがその再現や再現方法を見出すことの不可能に直面し一旦は失望するのだが、今度はそのような体験をしたという事実が重要視されることになる。ここにおいて身体的な快感や幸福感は精神的に扱われることになる。既に『見出された時』のテキストにおいて明らかになっているように、このような幸福感はマドレーヌ菓子を浸した紅茶に留まることなく、全く別の状況で、つまり二度とマドレーヌ菓子から幸福感を得ることはないのであるが、それとは関係のない状況で同じような幸

福感を得ることが出来ているのである。従ってこのような幸福感が出現するかどうかということは、同じような状況を設定すれば可能となるというようなものではなく、全くの偶然によるのである。場合によってはそれが全く出現しないということもあるかもしれない。そのためそのような幸福感の再現ということではなく、その存在という事実を前にして果たしてそれは何であったのかという問題へと転化していくのである。「私」は次のように言う。「そして私はいかなる論理的な証拠をもたらしませんが、その至上の幸福、他のものが消えてしまったその現実が明白であるということの、この未知の状態が何であり得たのか再び自問し始める。」(CS p.45)

このマドレーヌ菓子は、「私」に様々な回想をもたらすことになる。その味覚がどこから来たものであるかも明らかとなる。このちょっとした味覚こそが身体的に根強く残り、それが引き金になり回想をもたらすことになるのだ。つまり「古くからある過去が何も存続しなくなり、人々の死の後、物の崩壊の後、より弱々しくはあるがより生き生きとしていて、より非物質的で、より執拗で、より忠実なもののみ、香りとか風味とかが、残ったものの廃墟の上で、思い出すべく、待つべく、期待すべく、ほとんど触知されない小滴の上で、思い出の巨大な建造物を、たわめることなくもたらしべく、魂のように、ずっと長い間残っているのだ。」(CS p.46)

そしてこのことが既に指摘した『見出された時』の中において、「私」がゲルマントという名に何故動かされたのかということをも明らかにする。最初はただ単にマドレーヌ菓子を浸した紅茶を飲んだということにすぎなかったのであるが、それが大きな回想へと繋がっていくのである。「私」は次のように書いている。「そして私は私のおばが私に与えたシナノキの花の煎じ茶に浸したマドレーヌ菓子のかけらの味を再認するや否や（私は何故この思い出が私をこんなにも幸せにするのか未だ知らないでいたし発見することをずっと後まで延期しなければならなかったけれども）(中略)同じく今私たちの庭の全ての花とスワン氏の公園の花、そしてヴィヴォンヌのスイレン、そして村の善良な人たちと彼らの小さな住まいと教会とコンブレ全々とその周辺、形と堅固さを持つこの全てが、街と庭が、私の紅茶の茶碗から出てきたのだ。」(CS p.47)

この紅茶のもたらした幸福感については依然として明らかになっていない部分もあるが、それが様々な回想をもたらしたことは事実である。それは幸福感を覚えると直ちに何らかの現象に結び付いて想起されるというものではなく、つまり直線的なものではなく、あんなこともあったこんなこともあったというように次々と連鎖的に生じてくるものなのである。つまりここにおいて幸福感とはそれ自体再現を求められるものではなく、それを出発点として様々な回想をもたらす極めて精神的なものであることが明らかだろう。それではこの幸福感とはそもそも何なのであろう。何故最初は具体的な快感として捉えられるのであろうか。この問題について考察するために、我々は再びブルーストの『見出された時』に戻ることにしよう。

第八章 『見出された時』とドゥルーズ

『失われた時を求めて』において「私」の感じた幸福感について、『見出された時』のテキストをドゥルーズを参照しながら読解していこう。ドゥルーズは『失われた時を求めて』の解読の書である『ブルーストとシーニュ』を著して、示唆に富んでいる。『失われた時を求めて』という題名それ自体は記憶をテキストとして提示されたもののように思われるが、ドゥルー

ズによればそうではなく、「私」が一人の文学者として学習していく過程であると捉えるのだ。だから単に思い出を語るというように過去を志向するのではなく、新しく文学者となるための未来を志向していることになる。そしてそのためには「私」の感じた幸福感をただ単にそれとして提示するだけではなく、それが一体何であったのかを明らかにする必要があるのだ。単なる提示であるならば、思い出にすぎないわけである。もちろんこのことについて「私」も自覚的であって、マドレーヌの味で感じたのと同じような幸福感をゲルマンの館の中庭に入っていく時の敷石で感じた時、「再びまばゆくはっきりしない幻があたかも私にこう言っていたかのように私のそばをかすめた、〈もしお前にその力があるのなら通りがかりに私を捕らえよ、そして私がお前に眼前させている幸福の謎を解くように努めよ〉。」(TR p.223)

この時「私」はヴェネチアを想起するのであるが、マドレーヌ菓子の時はコンブレーだった。そのこともあり「私」は次のように考えるのである。「同じようにプチット・マドレーヌの味が私にコンブレーを思い出させていた。しかし何故コンブレーとヴェネチアのイメージが、次々と、確信に類似した、そして十分ではあるが、他の証拠もない喜びを、死を私にとってどうでもよいものにさせるために、私に与えていたのか。／それを自問しながらそして今日は解答を見つけると決心して、私はゲルマンのホテルの中に入った」(TR p.223)。

過去の思い出をそれこそ忘れてしまっていたものも含めて掘り起こしていくのではなく、何が幸福感をもたらすのか明らかにしていこうということである。もちろんそれは単なる抽象的な観念の作業になるのではなく、前提として幸福感を覚えたという事実があるためにいわば根拠のあるものなのである。よくわからないということがあれば、すぐに立ち帰ることのできる事実が存在しているのである。逆に言うならば、幸福感をもたらした事実が「私」をして考えさせているということも言えるだろう。この幸福感を解明するためには、まず前提となる事実を説明し解釈を試みなければならない。それは何度でも試みなければならないし、その過程において新たな発見というものも出てくるであろう。忘れていたり気が付かなかったという事実もあるかもしれない。従って解釈の過程において、更に解釈すべき事実や事柄が生じてくることになる。そして当初は感じるだけ、体験するだけでよかったのだが、その後は解釈するという知的な作業に入らなければならないのである。ここにおいて注目しなければならないのは、幸福感をもたらした事実は現に存在するのであるが、容易に再現されることはなく、あくまで偶然によってしか存在し得ないとなれば、それを思い出した知的に捉え直すことしかできないのであるが、その全貌は明らかではないのだ。それは実際のところよくわからないからであり、繰り返し解釈することを求めるわけであるし、解釈することが可能なのだ。従って幸福感は様々な解釈を要求するというところで、テキストを生み出す機械としても捉えることができるのである。ドゥルーズが『失われた時を求めて』を文学機械として捉えたのは、その意味である。逆に言うならば、『失われた時を求めて』は「私」が過去を思い出して語るというのではなく、この世にある幸福感をもたらすものを探し求めているのである。しかしそれはマドレーヌやマルタンヴィルの鐘楼を求めることを意味しない。それらを通して幸福感を説明し解釈し展開していくことなのである。そして「私」が『見出された時』において辿り着いた説明は次のようなものであり、これによってこそ「私」は『失われた時を求めて』のテキストを書くこ

とが出来たわけである。「私」は樂園を構成するようなものを考えながら次のように言う。「私は素早くその全てに深入りしないでした、私がより緊急に促されていたのはこの至上の幸福の原因、それが認められる確かさの性質の原因を探ること、以前延期されていた探求である。ところで、この原因、私はこれらの様々な至福の印象それは現在の瞬間と同時に、現在に過去を侵食させ、二つの時のうちどちらに私が存在していたかを知るのを私にためらわさせるまでに、かけ離れた瞬間において私がそれらの印象を感じていた時に共通したこれを持っていた印象を比較することでほんやりとではあるが見分けていたのだ。本当のところ、その時私の中でこの印象を味わっていた存在は昔の日と今それが持っている共通したものの中で、それが持っていた超時間的なものの中で、この印象を味わっていたのであり、その存在は現在と過去の間のこれらの同一性の一つによって、彼が生き、物事の本質を享受することのできる唯一の環境、つまり時間の外にいたことができた時にのみ現われていたのである。このことは私の死に関する私の不安がプチット・マドレーヌの味を無意識に私が再認した時に終わったということを説明していた、何故ならこの瞬間私であった存在は超時間的な、その結果将来の浮き沈みを気にかけない存在となったからである。このような存在は、類推の奇蹟が現在において私を逃がさせてくれたたびごとに、行為や即時の快樂の外でしか、私のところに決してやって来なかったし、現われることもなかったのである。ただそれは昔の日々、失われた時を私に見出させる力を持っていて、その前では私の記憶と理解力の努力は常に失敗していたのである。」(TR pp.227-228)

つまりただ単に過去の日々を思い出すとか、それについて何らかの考察を加えたとしても意味はないのである。ある種の観点、「私」の言うところの超時間的な領域において捉えたものでなければならない。その時「私」は何らかの判断とともにそれを受け入れているのではなく、ただひたすらその場において引っかかってきたものを集めていくのである。この時「私」はドゥルーズの言う器官なき身体と化していて、網で獲物を得るように巣を張り引っかかってきたものに反応する蜘蛛にたとえられている。要するに『失われた時を求めて』とは巣に引っかかったものの集積であって、「私」はそして我々もまたこのテキストから様々な解釈をすることを求められるのである。つまり「私」は『失われた時を求めて』のテキストを書くことを求められ、我々はそのテキストを解釈することを求められるのであり、その意味で『失われた時を求めて』は文学機械として捉えられることになるのだ。そしてこの蜘蛛や蜘蛛の巣という表現はまさに『ナジャ』においても見出されるのであって、我々がこれまで『失われた時を求めて』やドゥルーズに言及してきたことの意味が理解されるだろう。つまり「私は私が取りかかろうとしている物語の周辺に、有機的次元の外で私が理解し得るような (下線原文) つまり人生が偶然に、最大のものから最小のものまで委ねられ、私が抱いている共通観念に反して、突然の接近や、啞然とさせる一致や、精神面の全く別の飛躍に打ち勝つ反射神経や、ピアノにおけるような同時に強く弾かれた和音や、見えさせる、しかしその時、他のよりもまだより素早いというのでなかったとしても、見え (下線原文) させるであろう稲妻といった世界である守られたものとしての世界の中に私を導くまさにその限りにおいて、私の人生で最も顕著な挿話しか語る意図はないのだ。そこで問題になってくるのは恐らくほとんど確かめることはできないが、絶対的に思いもよらない、乱暴に不随的な性質、それらが目覚めさせる疑わしい観念連合の種類、あな

たがたを空中にかかっている若い蜘蛛の糸から蜘蛛の巣へ、つまりこの世において最もきらめき最も優美であるだろうが、隅や、その近くにおいては、蜘蛛ではなかったものへと通過させるやり方によって本質的な価値を持ついくつかの事実なのである。」(PI pp.651-652)

第九章 『ナジャ』とドゥルーズ

ブルトンによって示された蜘蛛の巣に捕らえられた挿話の一つがまさにナジャの物語であるわけだが、ブルトンとナジャはドゥルーズから見ればどのように捉えられるのであろうか。ドゥルーズが『ミル・プラトー』において「非分節化する、有機体であることをやめるとは何を意味するのか。いかなる点でそれが簡単であり、我々がそれを毎日していることをどのように言うか。」(MP p.198)と書いた上で、それには慎重さが必要であるとするのだ。つまり日常的であることなのだ。その意味でシュルレアリスム的であるとは言いながらも、ブルトンとナジャについては極めて通常の関係であることが前提として理解されるべきだろう。そしてその上で、ブルトンとナジャがドゥルーズの言う蜂と蘭の共進化と同様のものとして捉えられるだろう。つまり受粉の媒介によって蜂は蘭の中に入り込み、蘭は蜂を引き入れるようにサインを発するのであるが、ブルトンはナジャと出会うことによってナジャの中にあるシュルレアリスムの要素を引き出すことができるのであり、ブルトンなしではナジャはただの風変わりな女性にすぎないわけである。またブルトンにしてもナジャに出会わなければ、シュルレアリスムのイメージを触発されることはなかっただろう。ミクロ的に見ればブルトンとナジャの関係はまさにシュルレアリスムのイメージでもって捉えることが出来るが、マクロ的に見ればブルトンとナジャの出会いはい体何を意味するのかを考えなければならなくなる。ここにおいてドゥルーズが指摘しているヒュームの言う因果性が出てくるのである。ある知覚や出来事の後に何らかの知覚や出来事が生じるということが繰り返されると、そこに因果性が生まれてくる。もちろんそれは科学的根拠としては薄弱なところもあり、パヴロフの犬の実験のように餌を与える時に必ずベルが鳴らされるとなると、あたかもベルが餌を生み出しているように錯覚されるかもしれないが、錯覚を錯覚として理解できる保証はない。つまりこの因果性はあくまで個人の抱く信念でしかないのだ。従って因果性は知覚や出来事の間を接続するものではあるのだが、ドゥルーズによれば非意味的接続であり、意味としては零度なのである。しかし我々は科学的根拠を持たないながらも、一種のサイエンスフィクショナルな世界観に基づいてそれに安住する形で生きていることも事実なのであって、太陽が東から昇るという表現も科学的におかしいとして退けることもないのである。ドゥルーズからすればこのような関係をいくら集めてみたところで全体化することは不可能であるし、関係を指摘する以前に全体である世界を提示することすら出来ないのである。従ってドゥルーズは様々な関係が成立する状態をまず肯定するとともに、その無秩序をそれとして放棄するのではなく、その関係がいかなるものであるかの理由も求めることになるのだ。というのも、関係についてはよくわからないものの、存在としては何らかの形で接続していることは確かだからで、そこに何らかの意味を求めるわけである。そしてその際意味として出てくるのが因果性ということなのである。ブルトンは『ナジャ』のテキストにおいて、蜘蛛の存在を指摘した後に自ら問題にする諸事実について次のように書いている

る。「問題であるのは、純粹な検証という裏書があっても、その都度信号としてあらゆる外観を呈し、正確にいかなる信号であるか言えないとしても、全くの孤独の中で、私が本当とも思われぬような加担を自らに発見するということを引き起こしたり、私が船の舵を一人で取っていると思込んでいるたびに私の思い違いを私に確認させるいくつかの事実である。最も単純なものから最も複雑なものまで、我々にとって重大で、本質的なものがそれに依存しているという非常に純粹な感覚を伴って、非常に稀な物を見たとかこれこれの場所に我々が到着したといったことが我々の側から引き起こす、特別で、定義し難い動きから、遠くから我々の理解力を越え、ほとんどの場合、我々が自己保存本能に訴える場合にしか、我々の推論に基づいた活動への帰還を認めないある種の状況の連鎖、競合が我々にもたらす我々自身との和解の完全な欠如に至るまで、これらの事実を階層化する必要があるだろう。」(PI p.652)

これを今言葉に置き換えて考えてみるならば、それぞれの言葉がシニフィアンとシニフィエに分かれ機能するとしても、シニフィエがあまりにも多元的で最早意味を持たないに等しいのであれば、そのような言葉は他のシニフィアンと結び付くことによってしか成立し得ないだろう。シニフィアンがあまりにも意味を持ちすぎることによる理解の不可能は、その意味とされるシニフィエが最早シニフィエではなくシニフィアンにすぎないからである。そしてここにおいてシュルレアリスムのイメージ論、更には自動記述論としても理解できるだろう。このことは逆に考えるならば、つまり意味は存在しないのだと考えるならば、様々な言葉の結び付きが可能になる。つまり理性や経験や常識といったものに縛られない言葉の結び付きが可能となるのだ。このような意味を持たない全体をどのように捉えるか。ドゥルーズは器官なき身体として捉えているが、それは例えばヘーゲル的な矛盾解消のための弁証法ではなく、既に指摘したように接続と切断で処理していく立場なのである。例えばドゥルーズ論として既に指摘されていることであるが³⁾、ドゥルーズの著作の題名を例として挙げてみるなら、『経験論と主体』、『ニーチェと哲学』、『マゾッホとサド』、『差異と反復』、『資本主義と分裂症』、『ライブニッツとバロック』、『記号と事件』、『批評と臨床』のように接続詞の「と」が多用されている。著作の全てがこの「と」で表現されているわけではないのだが、大半はこのように「と」が使われている。この「と」の意味するところは、容易に別のものと繋げることができる、あるいは繋がることのできるということであって、題名に示されているように二項を結び付けるということには留まらない。いわば「と」を使うことによって、永遠に別のものを結び付けることができるのである。また「と」をはずすことによって、従来結び付いていたものを容易に切り離すことが出来る。そしてそのことによって、既にそこに何かがあったということさえ認識されないだろう。欠如が欠如として存在しないということなのだ。また題名にあるように二項を結び付けた場合でも、一項目が二項目より優位にあるということの意味しないし、その逆もまた同様であり、更にはその二項が対立関係にあることも意味しない。善と悪、正と邪、美と醜という例を挙げるならばまさに二項対立であって、それを矛盾なく捉えようとするならヘーゲルの弁証法を用いることになるのであるが、そもそもそれを二項対立として捉えるのはその意味するものを考えるからであって、ドゥルーズによればまずそこに意味の切断があるわけだ。そして「と」によって結び付けられたものは、単体で存在していた時と明らかに別のものになる。

これこそドゥルーズの言う生成変化である。また「と」を使うことによって、普通なら考えられないものも結び付けることが出来る。そしてこれはただ単に別のものを結び付けたという接続だけを意味するのではなく、本来なら結び付くはずのないものを結び付けることによって、それまでそれが持っていた意味、そこには言葉の意味だけではなく、それに伴って存在する社会的状況、歴史や常識といったものが逆に切断されてしまうことになるのだ。このように考えるならば、ブルーストの『失われた時を求めて』は一個の閉ざされた空間ではなくて、テキストそれ自体には書かれていなかったとしても、「と」を使うことによっていくらかでも付け加えることの出来る開かれた空間であることがわかるだろう。むしろ「と」でもって付け加えることを誘導するテキストであると言えるだろう。これはブルトンの『ナジャ』においても同様であって、ブルトンにとって気になる諸事実はいくらかでも付け加えることができるのである。それはブルトン自身明言している通り、『ナジャ』が「総括的な報告」(PI p.652)ではなく、ブルトンが「易々と思ひ出すにとどめておこう」(PI p.652)「時の気紛れに従ってそれを語ろう」(PI p.653)という立場を取っているからである。しかし「と」でもっていくらかでも付け加えることの出来るテキストを目の前にして、我々はそれを眺めているだけでよいのであろうか。我々はテキストを読解することによって、ブルトンから、あるいはテキストそれ自体から要請されていることがあるのではないか。『失われた時を求めて』と同様に『ナジャ』についても、我々が果たさなければならないことがあるのだ。

第十章 『ナジャ』における恩寵の問題

ドゥルーズの言う接続と切断ということから様々な関係が成立し得るのであるが、それでも現実には他の関係ではなくある関係が現出するということになるのであって、例えばブルトンが『ナジャ』においてヴェルサイユからパリに向かう車の中での話をする時、「私の隣にいた女性はナジャであったが、全く別の女性、そしてある別の女性（下線原文）でさえあり得たではないか」(PI p.748)と書くのであるが、結局のところ現実にはナジャが座っていたという事実を認めなければならない。様々な関係が成立し得るにも拘らず、他でもなく何故その関係が現実に存在するのかについて、ドゥルーズの考えを批判的に捉えたジジェクは『身体なき器官』において「恩寵」(OWB p.4)の問題を提示するのだ。そもそも既に指摘したように、ある知覚や出来事に対して様々な解釈を試みても、それでも解釈し切れない部分が残ってしまう。考えたけれどもよくわからなかったというだけではなく、もともと考えることさえ思いつかなかったということもあるのだ。我々からすればある知覚や出来事があったのは全くの偶然と考えるのであるが、神の側から見れば偶然ではなく必然なのだというわけである。ここにおいて『失われた時を求めて』では解釈を求めていたものが幸福感であったとするなら、『ナジャ』においては恩寵であると指摘することが出来るであろう。ブルトンは『ナジャ』の本文の冒頭において、「私とは誰か。」(PI p.647)という自己同一性についての問いかけをするため、その観点のみからテキストを読み進んでしまいがちになるが、その問いかけをした後でブルトン自身が自らの恩寵の問題に触れていることに自覚的であればならない。ブルトンは次のように書いているのだ。「私は他人と比べて、私の違いが何に基づいているかではないにしても、何か

ら成り立っているのか知ろうと努めている。他の全ての人たちの中にあって私はこの世に何をしにやって来たのかそして私の判断力でしかその運命に応えることができないようなどんな独自の使命を私はもたらすのかがわかるのは私がこの違いを意識する正確な度合によるのではないか。」(PI p.648)とした上で、「私の側からのいかなる奔走にも応じることなく、時として私に起こったこと、嫌疑をかけ得ない方法で私に到達し、私が対象となっている個人的な恩寵と失寵の能力を私に十二分に見せることを易々と思い出すにとどめておこう。」(PI pp.652-653)

つまり「私」という存在は確固たるもの超越的なものとして安定的にあるのではなく、「私」を取り巻く世界に依存しているのである。どのようにでも変化するという言い方は正しくないが、超越的に不変であるとは言えないだろう。そしてこのような世界と「私」との関係が多様でありながらも、現実にはそれなりにある関係として存在するということになる、それは単なる偶然というよりは神の意志による必然であると考えられるのである。というのも様々な関係が可能な世界に対する「私」の反応を知ることによって、自分自身というものが明らかになってくるからである。この点についてブルトンは、自己同一性の問題と関連させて次のように書いている。「私自身についてのこの見方は私自身を予め想定し、時間とともに構成するいかなる理由も持たない私の考えの完全な図を優先的次元に恣意的に位置させ、この同じ時にその精神的基盤の欠如が、私の意味するところでは、いかなる議論も受けることなどあり得ない、取り返しのつかない喪失、贖罪や失墜の観念を含む限りでしか私には誤りのように思われぬ。肝心なのは私がこの世でゆっくりと発見していく個人的な素質は、私に固有なものであるが私には与えられていない、全体に関わる素質の探求から何ら私の気をそらせることはないということだ。」(PI pp.647-648)

ここにおいて自己同一性と恩寵の問題が結び付くのだ。「私が誰であるか」を明らかにするためには、恩寵が必要ということなのである。もちろんここで指摘しておかなければならないのは、明らかにすべき「私」とは全くの白紙の状態というわけではないということだ。というのも、ブルトンは他人と区別される存在であって、特別な使命を与えられた存在である、少なくともそうであるべきだという思いが前提としてあるからだ。だからこそ「私とは誰か」とまず問いかけるわけであって、その前提がなければ問いかけることもないであろう。それではいかなる方法によって、ブルトンの言う恩寵は明らかとなるのか。『失われた時を求めて』で幸福感を明らかにしていく端緒となったのは、まずマドレーヌの味であった。『ナジャ』においては、まずナジャの物語が始まる前段階においてブルトン自身によって明らかにされている挿話の数々である。そしてその最大のもはナジャの物語である。それならばこれらの挿話群は、ブルトンの言う恩寵のあるなしについて解答を提示していると言えるのであろうか。テキストそれ自体としてはその解答は存在しないということになるのであるが、正しく言えば挿話それ自体が答えなのである。このような様々な不可思議な体験をしているのであるから、自分に恩寵がないわけがないというのがブルトンの態度なのである。しかしその恩寵の内容なり意味するところは明確ではない。そしてそれこそブルトン自身そして我々が解釈すべきことなのである。もちろんブルトンはテキスト中においてもその解釈を試みている。その最たるものが「本当のナジャとは誰なのか」(PI p.716)という問いかけに始まる一連の考察であるし、その直前

においては「人生は暗号文のように解明されることを求めるかもしれない。」(PI p.716)と書いているのである。ただ問題とすべきは、ナジャの物語において日記形式で語られる部分が終わってその直後の次のような記述である。「この必死の追求がここで終わるというのはあり得るのか。何の追求か、私はわからないが、このように精神的誘惑のあらゆる手を尽くすための、追求 (下線原文) なのだ。」(PI p.714)

ここにおいてブルトンが何を追い求めているのか知らないというのは、ナジャもしくはナジャとの出会いについての解釈がまだ十分ではなく、従って解答を導き出せていないということなのか、あるいは更に追い求めていくものがあり、それは未知の存在であるということなのか、いずれかであろう。仮に前者であるとするなら、解答を導き出せていないまでも、何を追い求めているのか知らないということはないと思われるのだ。そのため後者である可能性も高いが、前者を完全に否定し切れないのは、この後ナジャについての解釈を試みているからだ。また後者である可能性が高いとする根拠としては、ナジャの物語を始める前段階において様々な挿話を紹介しながら、次のような考えを明らかにすることが挙げられる。「とにかく、この種の一連の観察とこれから続くその提示は、無ではないにしても、少なくともそれ自体に対するいわゆる厳密な全ての計算、順序だった適用を要求し、前もって計画され得た全ての行動のかなりの不十分さを意識させた後、何人かの人たちを街中へと急がせることができるだろうと私は期待している。」(PI p.681)

つまり『失われた時を求めて』において思いがけない形で訪れた幸福感を巡ってその原因追求のためにエクリチュールを展開するブルストは、確かにコルク張りの部屋に閉じ籠った住人であったのだから、ブルトンはナジャやナジャとの出会いについての解釈を試みながらも、恩寵を明らかにする様々な出来事を追い求めているのである。そのような出来事が起これば、恩寵があると証明することが出来るとブルトンは判断するのである。それはブルトンも指摘しているように、計算されて起こるようなものではなく、まさに思いがけない形で起こるのであるから、それが果たして何であるかわからないということから、何の追求か自分は知らないということになるのだ。そしてまたそのような出来事は、これで証明完了というような形で終わるわけではなく、様々な解釈を要求するものであるから、ドゥルーズの言う「と」によっていくらかでも接続可能であり、その意味で『ナジャ』は開かれたテキストなのである。このことはナジャの物語が終わった後、様々な考察を加えていく段階で明らかになっている。つまり『ナジャ』は開かれたテキストであってナジャ以外の女性も当然入ってくる可能性があるということ、ただ、ブルトンにとって当時理想の女性、テキスト上においては「君」と表記されていたシュザンヌ・ミュザールが出現したことによって、開かれたテキストではありながらも付け加わるのは「君」しかいないということを明らかにするのである。「最早思い出すことも出来ないが、偶然のように、この本の始まりを知っていた君は、非常に都合よく、非常に乱暴にそして非常に効果的に私のところに介入してきたので、私が本を〈開き戸のように出入り自由にする〉ことを望んでいて私は恐らくは決して君しか入ってくるのを見ないだろうということを恐らく私に思い出させることが出来たのだ。入るのも出るのも君しかいないのだ。」(PI p.751)

第十一章 『ナジャ』における時間という視点

2010年にゴンクール賞を受賞したミシェル・ウエルベックの『地図と領土』は、独特な読後感をもたらす小説である。本論考においてこの小説を分析する意図はないが、論理の展開上一つのきっかけをもたらしてくれるので言及しておきたいのだ。作品それ自体は、主人公である芸術家ジェド・マルタンの物語といったものである。ジェド・マルタンは作家ミシェル・ウエルベックの肖像画を描くが、そのウエルベック自身作中で殺害されてしまうという事件が起こる。その事件も解明され、ジェド・マルタンも引退してパリを離れることになる。物語は一連のこうした出来事とともに父親との関係や恋人との出会いと別れについても織り込まれるのであるが、これだけならここで特に取り上げる必要もなかったのである。ところがエピローグにおいて、突如として語り手はジェド・マルタンの晩年そして死後について言及し始めるのだ。この作品がある芸術家の一生についてのものだという諒解があるならまだしも、一連の出来事を物語として語っているという体裁をとりながら、一挙に時は三十年も過ぎてしまうのである。つまり語り手はジェド・マルタンの一生を語るという形を取らずに、実は主人公の死後という視点から語っていたのである。更に言うなら主人公のジェド・マルタンは1976年生まれで、70歳でこの世を去るとなると、2046年であり今よりも後の視点を設定しているのである。これを非現実と指摘したいわけではない。このような視点から見た場合、そこで語られる出来事よりもむしろその間の時間の方に我々の関心は向かうことになるのである。そして『失われた時を求めて』においては、時間の問題は更に重要であるだろう。失われた時をいかにして見出された時とするかの物語としても読めるからだ。「私」は『見出された時』において、現実というものを捉えて次のように表現するのだ。「人生によって提供されたイメージは、現実には、その時、多数の違った感覚を我々にもたらしていた。例えば、既に読んだ本の表紙の眺めは、その題名の文字の中に夏の夜遠くにある月の光線を織り成した。朝のカフェ・オ・レの味は、かつてはよくあったことだが、牛乳が固まったように思われた白くて、クリーム状の襲のついた、磁器の茶碗で我々がそれを飲んでいて、よい天気この漠然とした希望を我々にもたらしているし、日中まだ何もせず時間が一杯の時、わずかな日光の明るい不確かさの中で我々にほほえみ始めたのである。一時間は一時間でしかないのではなく、香水と、音と、計画と天気で一杯になった器なのである。我々が現実と呼ぶものはこれらの感覚と我々を同時に取り囲んでいるこれらの思い出の間のある種の関係なのである」(TR pp.249-250)。

このように考えるならば、ある出来事が単発として独自に存在しているのではなく、回想する我々との間で様々に変化する余地を残しているということなのだ。このことを理解した上で『ナジャ』のテキストを見直してみるならば、そもそもブルトンとナジャとの出会いについては、『ナジャ』として1928年に刊行される以前に、1927年の秋『コメルス』誌に『ナジャ／第一部』という題名で公表され、また10月6日の出来事が『ナジャ (断片)』と称して『シュルレアリスム革命』誌に公表されている。この時点においてはナジャと出会ったという驚きを伴っていたであろうと推測される。ところが1928年の初版において、既にナジャとの出会いについては時間的要素でもって捉えられる部分が出てきているのだ。日記形式で書かれた後、ブルトンはナジャについて様々な考察を加えていくのであるが、まず次のような箇所がある。「私は幾度

もナジャとまた会ったし、私にとって彼女の考えは更に明らかになったし、そして彼女の表現は軽やかさと、独創性と、深さの点でよくなった。同時に彼女自身のある部分を引きずって、最も人間的に明確になった取り返しのつかない破綻、私があの日知った破綻は少しずつ彼女から私を遠ざけたということはある得る。」(PI p.718)

この部分は原文では複合過去もしくは半過去で語られ、日記形式で語られる部分が歴史的現在であることと対照的で、ナジャの存在は既に過去のものとなっている。そして次にブルトンがナジャについて書く時、つまり「私は結構前から、ナジャと理解し合うことをやめていた。実を言うと、恐らく私たちは一度も理解し合ったことがなかったのだ」(PI p.735)の部分においては、大過去が使われるようになっていく。もちろんこれは時間の経過ということではなく、ブルトンの意識の反映として捉えることが出来るだろう。そして我々がここで問題にしたいのは、1962年の改訂によって生まれた時間についてなのだ。ナジャの物語の冒頭、「去年の10月4日」(PI p.683)とあるところにブルトンは注を加え、「1926年のことである。(アンドレ・ブルトンによる注、1962年)」(PI p.683)としている。つまりこの時間の経過にブルトンは意識的であったということである。それならば1926年あるいは刊行された1928年から改訂した1962年の間に、ブルトンにおいて生じた外面的あるいは内面的変化はどのように反映されているのであろうか。ブルトン自身「序言」において、この改訂は「表現において適合と更には流動性をより少し手に入れたいと思う」(PI p.645)ためとしている。このこと自体に問題はないのだが、ブルトンがナジャと出会ったという事実は現に存在するとしても、その捉え方には変化があるだろうということだ。ブルトンは主観性と客観性の問題に触れている箇所でも、「35年の後に(古色が深刻だ)」(PI p.646)と表現しているが、記憶の曖昧さや不明瞭という点を考えに入れるにしても、捉え方に全く変化がないということではないのだ。ブルトンの内心においてその点を明らかにしたいという思いがあるからこそ、主観性と客観性について問題にしていると思われるし、実際「序言」において「感情的状態の表現に時を隔てて手を入れる試みは、現在それを再び体験することができなければ、必然的に不調和と失敗という結果になる」(PI p.645)と書いているわけであるから、ブルトンは1928年の初版の『ナジャ』ではなく、別のものとして提示したかった、少なくともブルトンの中では別のものとして認識されるようになっていた考えるべきだろう。特に10月12日から13日にかけてのブルトンとナジャの関係を改訂版において削除した件についても様々な解釈が可能だろうが、出来事に対する解釈の変化というわけではなく、そもそもどのような出来事が起こったかについての削除が行なわれたわけである。これはナジャとの関係において、読者にある種の理解を要請することにもなるだろう。このようにある出来事が時とともに変化して捉えられるようになるということが理解されるだろう。場合によっては事実さえも変化させられてしまうということである。従ってある出来事が起こって、それ自体は過去のものであり何ら手を加えることができないとしても、それを解釈することになると、様々な要素が変化しなくとも、もちろんそんなことは考えられないが、時間とともにそこに様々な回想が入り込むことによっていくらかでも変化し得るということなのである。つまりたった一つの出来事であっても、我々はそれを時間とともにいくらかでも解釈し直すことができるということなのである。原理的にそれは無限に続くと言えるのであるが、そ

の前に我々の方が死期を迎えるという事態になってしまうのである。

終章

様々な知覚や出来事を前にしてそれらを解釈するとしても、どうしても解釈し切れないものが残る。このようにして成立する知覚や出来事はたまたまそうなったというのではなく、神の介在による必然と捉える可能性のあることは既に見た。しかしここにおいて全ては与えられたものとして理解すべきなのであろうか。例えば『失われた時を求めて』の場面で、「私」が紅茶に浸したマドレーヌ菓子によって幸福感に浸ることが出来る時、そのこと自体を偶然とか必然とか考える余地はあるのだが、その前段階において「私」は母親の勧めた紅茶を一旦は断っていて、思い直して飲むことになるのである。飲もうと判断したのは誰か。もちろん「私」であると答えることも出来るし、そうさせたのが神の介在によるものであり、必然であると答えることも出来るだろう。全てを神による必然と考えるのでなければ、判断の基準は「私」にある。ブルトンとは人と区別される違いを問題にするのであるが、それは例えば「私が自分で知っている趣味、私が自分に感じる親和力、私が受ける誘惑、私に起こり私にしか起こらない出来事、あらゆる種類のそれらの向こうに、私がやっていると自分で思う運動、私一人が体験されるべきである感情、多くのそれらの向こうに」(PI p.648) 見出したいと思っているのだ。個人的な趣味嗜好といったものは確かに個人の持つ性質であろうが、それは容易にわかるものであり、それをとり立てて問題にすることはないということだ。しかしこれらに関しても神の介入による必然と考えないならば、個人の判断ということになるだろう。確かに単なる好みということになると、個人の自由であり取立てて問題にすることもないのだろう。ところがこれがもう少し精神的な領域に踏み込んできたらどうだろう。『失われた時を求めて』においてマドレーヌ菓子もたらしたような幸福感ではないが、日常的に自分が主体的に選べる楽しみについて言及されているところがある。「最後に私の意識の中で同時に並置されている状態を内部から外部へと辿り続けながら、それらを包んでいる現実の水平線まで到着する前に、私は別の種類の楽しみ、ゆったりと座っているそれ、大気のよい香りを感じるそれ、隣人に邪魔されないそれを見出す。そして、サン・チレールの鐘楼で一時が鳴った時、午後は既に始められて、総計することを私に可能にしている最後の一突きを私が開き、そしてその後それに続く長い沈黙がフランソワーズが準備していて、読書の間、主人公たちの後に、出た疲れから私を元気付けるおいしい夕食まで読むために私に依然として許されていた全ての部分を青空の中で始めさせるように思えたことまで一切れ一切れと落ちるのを見る楽しみを見出すのである。」(CS p.86)

このような場合現実に体験し得るいくつかの事柄の中から、つまりいくつかの選択肢の中から自分の好きなものを選ぶという風に考えることが出来る。それではもう少し複雑なものに関してはどうであろうか。ブルトンはキリコの創作に関して次のような指摘をしている。「キリコはその時物のある種の配置によって驚かされて(下線原文)(まず驚かされた)しか描くことはできないそして閃きの謎は彼にとって驚かされたというこの言葉の中に収まると認めた。」(PI p.649) そして更に「彼にとって独自の明白さを提示しているこれらの物の配置よりも前に、これらの物自体に批判的な注意を向け、たとえ少数であるとしても、そのように配置されるよ

う求められたのがそれらの物であるのは何故かを探求する必要が依然としてあるだろう。」(PI pp.649-650) としている。つまりキリコにしてみれば恐らくは偶然の産物であるが、物体を様々な配置しある状態を前にして自らが驚かされたかどうかを創作の基準としているのに対して、ブルトンはその物体の配置について驚かされるよりも前に研究してみる必要があると指摘しているわけだ。そしてブルトンは対象となっている事物の配置よりも自らの精神の配置の方がより重要であると主張するのだ。つまり「私に関する限り、精神にとって物のある種の配置の出会いよりある種の物についての精神の配置がはるかにより重要であると私には思われるし、これらの二種類の配置はそれだけが感受性の全ての形態を支配しているのである。」(PI p.650)

このことは全ての判断基準が我々の内心にあることを意味するのではないか。この後ブルトンはユイスマンスを例として引きながら、次のように論理を展開するのだ。「私はユイスマンス、『仮泊』と『彼方』のあのユイスマンスとともに、提示されている全てのものを鑑定し、存在しているものの中で不公平にも絶望を選ぶ非常に共通したやり方を自らに見出す」(PI p.650)。

ここにおいて何を選び出すかについてはその都度異なるだろうが、その判断基準は我々の中にあるということなのである。そしてそれは個人的な趣味嗜好の水準を越えて、生存に関わる、といってもそれは物理的な次元での生死に関わるということではなく、重要な判断基準として捉えられるものである。ブルトンはユイスマンスの中にそれを認めるのであって、テキストにおいては「見かけは非常に頼りないが、我々にとってあらゆる救いであり得る指輪と我々を垂直に沈没させるために陰謀を企てている様々な力のめまいを伴う装置との間の、必要で、生死にかかわる (下線原文) この識別」(PI p.650) と表現している。これは恐らく論理的に突き詰めたところで成立するものであって、ある程度理屈による表現も可能であると思われる。ただそれは別に事後的に解釈するというのではなく、一般的普遍的なものとして主張し得るものであるが、実際上はそのような理論や理屈に照らし合わせて判断するというものではなく、『失われた時を求めて』におけるマドレーヌ菓子のように無意志的なものである。ブルトンはこの無意志的なものを気付かせてくれた恩人としてもユイスマンスを評価しているのであって、その点については次のように書かれている。「誰も彼以前には、意識的な可能性で荒廃した土地で無意識的なもののこの大なる目覚めに私を立ち合わせさせるのではないにしても、少なくともその絶対的な運命、そして私自身にとって逃げ道をそこに探すことの無益を情をもって私に納得させることができなかったのである。」(PI p.650)

これは恐らく無意識のことを言っているのであろうと思われるし、事実ブルトンは様々な考察を加えていく中で、無意識に依拠したいことを明らかにするのだ。ただ依拠するとは言いながらも、漫然と受け入れようとしていたのでは駄目で、つまりそれはあたかも外から与えられたようでありながら、仔細に検討するならば既に我々の中にあつたということになるのである。ブルトンはユイスマンスを評価する上で次のようにも表現しているのだ。「彼はまた、外部からやって来るように思われ、多かれ少なかれ新しい性質を持っていて、かなり自問してみると我々の中にその秘密を見出すように思われる、偶発的なこれらの配列の一つの前でしばらく我々を動けなくさせる果てしないこれらの働きかけの一つの対象なのである。」(PI p.650)

ここにおいて外部と内部にまたがるドゥルーズが言うところの「共通概念」を成立させるこ

とが出来るのであるが、それは結局のところ自らの心の傾向を知ることなのである。これが恐らくは『失われた時を求めて』の幸福感と『ナジャ』における恩寵とを理解する手掛かりとなるだろう。更に『ナジャ』においては、ブルトンが求めている自己同一性や結局同じことだが、自分がいかなる点で他人と違っていかなる使命を帯びているかということについても明らかにしてくれるに違いない。このような心の傾向性を知ることによって、あるいはその過程において、我々は心を自由に遊ばせることが出来るわけであり、目的地を設定しながらも、その途中の段階で様々な寄り道をすることが出来るのである。その寄り道とは、そのことによって目的地が遠のくのではなく、その寄り道をするからこそが目的地に到達する最短距離であるということ、そしてそれが美しい軌跡を残すものであるということが理解されるだろう。

注

- 1) 引用部分の後もしくは文中にある略号は以下の文献を表わす。尚、訳は全て筆者による。
 - (PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Pléiade, Gallimard, 1988
 - (OR) Jack KEROUAC, *On the road*, Penguin Books, 1991
 - (MP) Gilles DELEUZE et Félix GUATTARI, *Mille plateaux*, Minuit, 1980
 - (OWB) Slavoj ŽIŽEK, *Organs without bodies*, Routledge, 2003
 - (TR) Marcel PROUST, *Le temps retrouvé*, folio, Gallimard, 1954
 - (CS) Marcel PROUST, *Du côté de chez Swann*, folio, Gallimard, 1987
- 2) André Pieyre de Mandiargues, *Le Désordre de la mémoire*, Gallimard, 1975, pp.113-115
- 3) 蓮實重彦『批評あるいは仮死の祭典』、せりか書房、1990年、p.63